

41980

教科書文庫

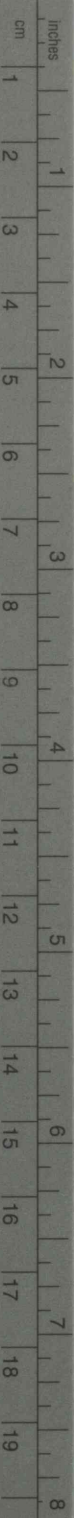
4
810
41-1937
200030
2227

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

375.9
Iw 1
資料室

國語 卷九

改訂版



375.9
Iw 1

日一十二月二十年二十和昭
濟定檢省部文
用科文漢語國校學中

岩波編輯部編

改訂版

國

語

文部省

檢定稿

岩波書店刊

岩波編輯部

廣島縣加茂郡彦村字小坪

木拍 卷繪 語物氏源



廣島大學圖書印



神佛堂

裏面源氏物語繪卷

國語 卷九 目次

一	讀書に就いて	小泉八雲	一
二	大和國原	武田祐吉	二
三	倭建命	(古事記)	三
四	萬葉集抄		三
五	平安京	藤岡作太郎	六
六	かぐや姫	(竹取物語)	六
七	都鳥	(伊勢物語)	六

才二
武強

目次

七一十二 (但し九編と板)

八	宇多の松原	紀貫之	六
九	古今集抄		七
一〇	須磨の秋	紫式部	六
一一	春は曙	清少納言	三
一二	菅原のおとゞ	(大鏡)	六
一三	源信僧都の母	(今昔物語)	九
一四	中世の文學	岡崎義惠	一〇
一五	新古今集抄		一三
一六	光頼卿の参内	(平治物語)	一六
一七	大原御幸	(平家物語)	一五

一八	新島守	(増鏡)	一五
一九	念佛と愛語		一四

念佛	親鸞	一四
愛語	道元	一四

二〇	日野の閑居	鴨長明	一四
----	-------	-----	----

二二	只今の一念	吉田兼好	一五
----	-------	------	----

二三	隅田川	(寶生流正本)	一四
----	-----	---------	----

二三	能面の表情		一六
----	-------	--	----

又野上豊一郎
能面の表情

Lafendiv Idam 喜永三子 子
父 伊予人 子 伊予人
母 伊予人
又 伊予人 子 伊予人



小泉八雲
ラフカチオ
ハーン

小泉八雲
ラフカチオ
ハーン
文學者
東京帝國大學
講師
イギリス人
後日本に歸化
明治三十七年
歿 年五十五

國語 卷九

一 讀書に就いて

小泉 八雲

批評家として最も勝れたものは公衆である。といつても、
一日一代の公衆ではなく、幾世紀に互る大公衆、更にいへば、冷
嚴な「時」の試煉を経て來た書物に對する、一國民乃至全人類の
意見の總和である。眞の名聲は、所謂批評家によつて作られ
るものではなく、幾百年に互る人類の意見の集積によつて成
立する。人類の意見は、洗練された批評家の意見のやうに鋭
くはなく、又明瞭でもない。思考よりも寧ろ感情に根ざした

一 讀書に就いて

もので、たゞ「これが好い」といふだけである。しかも、これが何よりもたしかな判断であるのは、非常に廣大な經驗の結晶であるからである。眞の良書鑑定法は、この幾代に互つて働く



小泉八雲

人類の書物檢定法と一致するものでなくてはならない。そして、その方法は至極簡單である。即ち書物の價值は、吾人がそれを一度讀んで満足するか、或は繰返して讀むことを欲するかによつて判定される。眞の良書には、最初讀んだ時よりも二回目には一層心を惹かれ、讀み返す度毎に新しい意義と美とが見出される

ものである。教育のある、高い趣味の人が二度と讀む氣にならないやうな書物は、淺薄なものか、まやかしのものかである。併し、唯一個の人の意見を絶対に誤のないものと考へるわけにはゆかない。一の作品を偉大ならしめるものは、多數者の意見である。一流の批評家にも、往々鑑識の鈍りもあり曇もある。たゞ累代の公衆の判断に至つては、疑を容れる餘地がない。數百年來名著とされ來つたやうな書物には、一讀しただけでは格別よい所がないやうでも、更に深く研究すれば、必ずそれが推賞される理由が発見されるものである。貧しい人々に對する最善の叢書は、「時」の試煉に合格した、このやうな大傑作のみから成るものである。かういふ大傑作の通有性は、それが永遠に古びないといふ

シェークスピア
1564—1616
イギリスの文
豪
ゲーテ
1749—1832
ドイツの文豪

ことである。大傑作は、一讀して直ちに青年に理解されるものではなく、初はたゞ表面的な意味や筋が面白いだけである。が、讀者が人生の經驗を積むに隨つて、次第にその新しい意味が見えて來る。十八歳の時面白いと思つたものは、それが良書であるならば、二十五歳になれば一層面白く、三十歳になつては全然新しい書物のやうに見え、四十歳にしては、何故今迄これ程の美しさが見えなかつたかと怪しまれる。五十歳、六十歳になつても同じ様なことが繰返される。勝れた書物は讀者の心の成長に比例して成長する。シェークスピアやゲーテの作品を偉大ならしめたのは、過去幾代の公衆によるこの異常な事實の發見である。

これについて、ゲーテには最もよい例がある。彼は多くの

短篇の物語を書いたが、子供はそれをお伽噺のやうによろこんだ。併し、彼はお伽噺を書くつもりだつたのではなく、人生の經驗ある人々の爲に書いたのであつた。隨つて、青年にとつては嚴肅な讀物となり、中年の者はその中の一字一句にも非常に深い意味を讀み、老人はそこに全世界の哲學と全人類の智慧とを見出した。要するに、讀者が人間として勝れてゐれば、あるだけ、深く人生を知つてゐれば、あるだけ、作者の偉大さを發見するのである。

といつても、それはかういふ書物の著者が、豫め自己の作品のもつ廣さや深さを意識してゐたといふ意味ではない。眞に傑れた技術は、自ら傑れてゐるなどとは氣づかずに、無意識に働くものである。又、作者の天分が大なれば大なる程、それ

を意識する機會は少い。何故ならばその天分は彼の死後永い年月を経て始めて公衆に理解されるに至るものであるからである。文學上の偉業は自ら偉大であると自任する人々によつてなされたのではない。

何千年の昔アラビヤの一漂浪者が夜の大空の星を眺め、人間とこの世を創造した見えない力との關係に心打たれ、その感動を歌つたものが、今猶ヨブ記の中に残つてゐる。彼は、天空は固形の圓天井であると信じ、その向ふにあるもの、ことなど夢想さへしなかつた。爾來、人類の天文に關する知識は如何ばかりの進歩を見たか。現在我々は、三千萬の太陽の存在することを知り、且それには各若干の遊星の附隨してゐることを推定してゐるから、現在の望遠鏡では約三億の他の世

ヨブ記
舊約聖書中の
一篇

ヨブ
ヨブ記の主人
物

雷
の
天

界が見えるわけである。恐らくこれらの中には、知的生物の棲んでゐるものもあるであらう。火星には我々の文明よりも更に進んだ文明があるといふ證明さへ得られるかも知れないといふ。我々の宇宙の概念とヨブのそれとの間には、實に霄壤の相違がある。しかもそれがために、彼の詩は一毫の美も價値も減じない。それどころか、新しい天文學上の發見のある毎に、ヨブの言葉は我々にとつて益、深い意味をもつて來る。これは、彼が眞正の詩人で、何千年の昔、その心情の眞實をさながらに披瀝したからである。

私のいふ傑作の如何なるものであるかは、これでほゞ理解されたことと思ふ。然らば、我々はかういふ傑作の中から、何を選んで讀んだらよいであらうか。先年、英國の科學者サー・

サー・ジョン・ラ
ボック
1834—1913

ジョンラボックが彼の所謂世界最良の書百篇の目録を作つたことがあつた。それをある書肆で廉價本にして出版した。すると又、サージョンにならつて、これとは別に、各、その最良と信ずるもの百篇を選出した人々がある。しかるに、この叢書を購入する人は多いが、讀む人は殆どない。これは、サージョンの選擇が悪いからではなく、唯一人の人が、別々な心をもつてゐる多數の人のために讀書課程を決定するといふことが無理だからである。サージョンは、彼に最も感銘の深かつた書物に對する一家の見を示したに過ぎない。他の人が試みれば自ら別な目録が出来るわけで、恐らく二人の人が同一の目録を作るといふことはあり得ないであらう。書物の選定は、如何なる場合にも個人的でなければならぬ。約言すれ

ば、我々は自己の衷にある光によつて、自ら選定しなければならぬ。何故ならば、如何なる文學に對しても、等しく最善の注意を向け得る如き多方面な人は殆どないのであるから、我々は小さい一題目——最も自己生得の才能や性向に適合した一題目に集注するのが得策であるが、この我々の本領が何處にあるかを判定することは、我々の性格傾向を知悉し、且それに十分の同情をもつてゐない限り、他人には不可能の事だからである。我々に容易に實行出来る唯一の方法は、まづ第一に、今迄自分が如何なる題目に興味を感じたかを明らかにし、第二には、その題目で書かれたものでは何が最もよいかを確め、かくて、同一題目を取扱つてゐると稱しつゝ、いまだ大批評家や大公衆に定評のない、一時的なもの、安價なものを捨て

て、ひたすらにその最上のものに没頭することである。併しながら、さういふ定評のある書物は、案外少いものである。ギリシヤ文明を除けば、諸他の文明は、何れも第一級のものには二三冊づつしか産出してゐない。凡ての大宗教の教理を具現した經典は、文學的にも第一級に位するものである。何故ならば、それは彫琢に彫琢を加へられて、その國語に於ける最高の完成を得たものであるからである。諸民族の理想を具現した勝れた敘事詩も亦、第一級に位する。第三には、人生の反映としての戯曲の傑作も亦、最高級の文學に數へられなければならぬ。が、眞に傑出したものは、金剛石と同じく、多量にはないものである。

(人生と文學)

二 大和國原

武田 祐吉

武田祐吉
國文學者
文學博士
國學院大學教授
東京市の人
明治十九年生

大和國
現奈良縣

高市
現奈良縣高市郡
十市・磯城
共に現同縣磯城郡の内

日本文學は、日本群島に居住した民族の間に發生し生育した文學であるが、古代にあつては、いまだ各種族が融合せずして分布し、その中、特に大和國に居を占めたものが有力な文化を醸成し、その所有する文學がつひに日本文學の主流を成すに至つた。かくて大和國は永い間文化の中心となり、現存せる上代文學に關する諸文獻は、おほかたこの地に於て成立した。

神武天皇が皇居を畝傍山の東南、橿原の地に奠められてから數十代千三百餘年の間、歴朝おほむね大和の中央部なる高市十市磯城の三郡に都せられた。

泊瀬の山々
現磯城郡初瀬
町附近の山々



畝傍山上より大和平野を望む

奈良山
現奈良市の西
北に連なる

交渉の多かつた山で、神事にはこの山から真榊を根こじにし、
またこの山の土を取つて齋瓮イハヒを作つた。
伊勢の酒と陶器

この三山を中心とする土地一帯が、古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて泊瀬の山々が聳え、南には多武高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また、多武高取の彼方には、吉野川を隔てて吉野の群山がそ、り立つてゐる。北方のみはや、開けて、奈良郡山の平原を控へてゐるが、それもその末には奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに四方山を以て圍まれた土地であるか

卷向の弓月が嶽
現磯城郡纏向
村に在る卷向
山の一峯

仁徳天皇
第十六代
孝徳天皇
第三十六代
難波の都
現大阪市内に
在つた高津の
宮と豊碓の宮
天智天皇
第三十八代
近江の天津の宮
現大津市の北
部に在つた
天武天皇
第四十代

ら、氣候は溫和であるが、寒暑の差はや、激しい。昨日まで青葉の茂つてゐた山も、一夜の雨に黄葉してしまふやうに感じられることも少くない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙かなる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽から出て、玉イハヒくしげ二上山に沈む。

この平和の郷に、古聖帝は皇居を定められた。人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目鼻にも偲ばれる。往古は天皇御一代ごとに宮室を更へさせられ、中に仁徳、孝徳、兩天皇の難波の都の如き、他の國に都せられたこともないではなかつたが、他はおほむね大和の國內に皇居を定められた。天智天皇ひとたび都を近江の天津の宮に遷し給ひ、大陸の文物に摸して都制漸く宏大となつたが、天武天皇に至つてふた、び大和の

手
ひら
の
校

飛鳥
現高市郡飛鳥
高市兩村の地
持統天皇
第四十一代
藤原
香具山の山麓
の地といふ
元明天皇
第四十三代
和銅三年
一三七〇年
平城宮
現奈良縣生駒
郡都跡村に在
つた

飛鳥の地に都し給ひ、ついで持統天皇は藤原の地に都宮を造營せられた。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を大和國最北の平原に遷し、こゝに平城宮を造營せられ、爾來七代七十餘年の間、帝都として榮えた。この地は南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せ、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城國に接し、西は生駒の山脈を以て河内國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地方と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開闊を喜んだ。も、しきの大宮人は、佐保の内に邸宅を連ねて、馬酔木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努め

古事記
三卷
國初から推古
天皇迄の史書
和銅五年撰進
日本書紀
三十卷
國初から持統
天皇迄の史書
養老四年(一
三八〇)撰進
懷風藻
一卷
最初の漢詩集
天平勝寶三年
(一四二)成
萬葉集
二十卷
奈良朝時代に
成つた歌集
恭仁の宮
現京都府相樂
郡内に在つた

た。古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられる。萬葉集の前身である幾多の歌集も、恐らくはこの時代の前半に成つたであらう。やがて都會文明は爛熟して、文藝に對する心持は貴族的遊戯的に墮落していつた。この間、時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移されたこともあつたが、それも長くはなくて、またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷されるにはよほど面倒な事情を伴なふやうになつてゐた。

あをによし奈良の都は咲く花のほふが如しと歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶉鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花咲みに咲めるを尋ぬる人もあらう。それから高取の山を越えると、山峽の間を流れて吉

巨勢の野 現高市郡西部
 紀伊の若の浦 現和歌山縣海草郡の海濱
 龍田の神 凡神 現生駒郡三郷村に在る官幣
 大社龍田神社 祭神天御柱命
 外一座
 住吉の神 現大阪市住吉區に在る官幣
 大社住吉神社 祭神表筒男命
 外三座
 泉川 現京都府相樂、綾喜兩郡を流れる木津川の一部
 ちばの葛野國 現同府愛宕、葛野・乙訓三郡及び現京都府一圓の汎稱

野の川はとほじろく西に走る。後の吉野朝の花は山上であつたが、萬葉人の遊んだのは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てられたのは昔からの事で、天武・持統兩天皇以後、屢、この宮に行幸せられた。
 萬葉人はまた、葛城山の麓なる巨勢の野を通つて吉野川の溪谷に出る。それから下ると、眞土の山を越えて紀伊の若の浦へ出る。奈良から難波への往還は、生駒山脈を越える。峯の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、まかゞやく難波の海である。四國九州へ、さては唐土への船舶はその岸の住吉の神に祈つて、眞楫し、ぬき漕ぎ分かれるのである。奈良から北へ奈良坂を越える、と、泉川の清流は鹿脊山の間を流れて来る。ちばの葛野國、

しんゆき、
 難波、
 生駒山脈、

近江一円、
 紀伊、
 紀伊、
 紀伊、

昔こそ歌
 萬葉集

興福寺
 法相宗三大本
 山の一
 現奈良市登大路町に在る
 たちかはりの歌
 萬葉集
 天平
 聖武天皇の御
 代の年號(一
 三八九—一四
 〇八)

てはさゝなみの近江國へは、これから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠である。
 昔こそ難波るなかと言はれ、けめ今は都引き都びにけり
 大君の敷きます時は即ち都である。大御心が一旦その地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことばは、
 むめて作らしし奈良の都も衰へて、わづかにその東部のみが興福寺の勢力のもとに踏みとゞまる。これが現在の奈良市である。
 たちかはり古き都となりぬれば、道の芝草長く
 生ひにけり、
 これは天平の中頃に、都を一時奈良から山城の恭仁に遷した

當時の作である。今の奈良に旅する人は、麥圃の間にそのか
みの平城宮の大極殿の礎石の遺存するのを見て、また同じ感
慨に浸るであらう。しかし、工作物は亡びても、いにしへ人の
生活の蹤は儼として残つてゐる。いにしへ人の残した文藝
の力は、たやすく吾人の心の上にいにしへ人の心呼び起さ
しめる。我が文化の故郷を偲ぶ者にとつては、大和國の一草
一石も意味のある存在である。

(上代日本文学史)

先蹤
例

倭建命

日本武尊

御名は小碓命

景行天皇の皇

子

景行天皇四十

三年(七七三)

薨 御年三十

大帶日子淤斯呂

和氣天皇

景行天皇

第十二代

纏向の日代宮

現奈良縣磯城

郡纏向村に在

つた景行天皇

の皇居

御子

倭建命

倭比賣命

垂仁天皇の皇

女

景行天皇の皇

妹

三 倭建命

大帶日子淤斯呂和氣天皇纏向の日代宮に坐しまして、天の
下しろしめしき。

こゝに天皇其の御子の建く荒きみこゝろを慥みまして詔
りたまはく、西の方に熊曾建二人あり、これまつろはず禮なき
人どもなり。故其の人どもをどれと詔りたまひて遣はしき。
此の時に當りて、其の御髮額に結はせり。こゝに小碓命其の
姨倭比賣命の御衣御裳を賜はり、劔を御懷に納れていでまし
き。

故熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重に

ア
ヤ
ヤ

船
下

新室樂せむと言ひとよ
三

圍み室を作りてぞ居りける。こゝに新室樂せむと言ひとよ
みて、食物を設け備へたりき。故其のあたりを歩きて、其の樂
する日を待ちたまひき。こゝに其の樂の日になりて、其の結
はせる御髪を童女の髪のごと梳り垂れ、其の姨の御衣御裳を
服して、既に童女の姿になりて、女人の中に交り立ちて、其の室
内に入りましき。こゝに熊曾建兄弟二人、其の童女を見めて
て己が中に坐せて、盛りに樂げたり。故其の酣なる時に、懷よ
り劔を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劔もて其の胸より刺し通
したまふ時に、其の弟建、見畏みて逃げ出でき。乃ち其の室の
椅の本に追ひ至りて、其の背をとらへ、劔もて尻より刺し通し
たまひき。

こゝに其の熊曾建白しつらく、其の刀をな動かしたまひそ。

倭男具那王
倭建命の御幼
名

僕白すべきことありと白す。かれ、しまし許して押伏せたま
ふ。こゝに白しつらく、汝が命は誰にますぞ。吾は纏向の日
代宮に坐しまして、大八島國しろしめす大帶日子、淤斯呂和氣
天皇の御子、名は倭男具那王にます。おれ熊曾建二人、まつろ
はず禮なしと聞しめして、おれをとれと詔りたまひて遣はせ
り」と詔りたまひき。こゝに其の熊曾建、まことにしかまさむ
西の方に吾二人を除きて建く強き人なし。然るに大倭國に
吾二人にまして建き男はいましたしけり。こゝをもて、吾、御名を
獻らむ。今よりのち、倭建御子と稱へまをすべしと白しき。
この事白しをへつれば、即ち熟蕨のごと振りさきて殺したま
ひき。故、其の時よりぞ御名を稱へて倭建命とはまをしける。

三

十

十二

こゝに天皇また頻きて倭建命に東の方十まり二道の荒ぶる神またまつろはぬ人どもをことむけやはせと詔りたまひて吉備臣等が祖名は御鈕友耳建日子を副へて遣はす時に柊の八尋矛を賜ひき。故命を受けたまはりて罷りいでます時に伊勢大御神の宮に参りまして神のみかどを拜みたまひき。其の姨倭比賣命草薙劔を賜ひまた御囊を賜ひて若し急の事あらばこの囊の口を解きたまへとなも詔りたまひける。

相模國 現神奈川縣の内

相模國 現神奈川縣の内

こゝに天皇また頻きて倭建命に東の方十まり二道の荒ぶる神またまつろはぬ人どもをことむけやはせと詔りたまひて吉備臣等が祖名は御鈕友耳建日子を副へて遣はす時に柊の八尋矛を賜ひき。故命を受けたまはりて罷りいでます時に伊勢大御神の宮に参りまして神のみかどを拜みたまひき。其の姨倭比賣命草薙劔を賜ひまた御囊を賜ひて若し急の事あらばこの囊の口を解きたまへとなも詔りたまひける。故東の國にいでまして山河の荒ぶる神またまつろはぬ人どもを悉にことむけやはしたまひき。故こゝに相模國に到りませる時に其の國造いつはり白さく此の野の中に大沼あり。此の沼の中に住める神いたくちはやぶる神なりとまをす。こゝに其の神をみそなはしに其の野に入りましつれば

走水の海

燒遣 現静岡縣志太郡燒津町といふ

走水の海 現東京灣口、房總・三浦兩半島間の浦賀水道といふ

其の國造其の野に火をなもつけたりける。故欺かえぬと知ろしめしてかの姨倭比賣命の賜へる囊の口を解き開けて見たまへば其の裏に火打ぞありける。こゝに先づ其の御刀もて草を刈りはらひ其の火打をもちて火を打ち出で向かひ火をつけて燒き退けて還り出でまして其の國造どもを皆斬り滅し即ち火をつけて燒きたまひき。故そこをば今に燒遣とぞいふ。それより入りいでまゐて走水の海を渡ります時其の渡りの神浪をたてて船たゆたひてえ進み渡りまさず。こゝに其の后名は弟橘比賣命の白したまはくあれ御子に代りて海の中に入りなむ。御子はまけのまつりごと遂げて覆奏したまふべしとまをして海に入りまさむとする時に菅壘八重皮壘

八重、繩壘八重を波の上に敷きて、其の上におりましき。こゝに其の暴浪自らなきて、御船え進みき。かれ、其の後の歌はせる御歌、

相模、松河

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君は

故、七日ありて後に、其の後の御櫛海邊に依りたりき。乃ち其の櫛を取りて、御陵を作りてをさめ置きき。

それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ

また山河の荒ぶる神どもをやはして還り上ります時に、足柄の坂本に到りまして、御糧きこしめす處に、其の坂の神白き鹿になりて來立ちき。かれ、其の咋しのこりの蒜の片端もて、待ち打ちたまひしかば、其の目に中りて打ち殺さえたりき。故

運船

日日生

甲斐 甲斐國 現山梨縣
酒折宮 現同縣西山梨郡里垣村に在つたといふ
筑波 現茨城縣筑波郡の邊といふ
科野國 信濃國 現長野縣科野の坂
現同縣下伊那郡から現岐阜縣惠那郡に越える峠
尾張國 現愛知縣の内
伊吹の山 伊吹山
現滋賀・岐阜兩縣に跨がる海拔一三七七米

其の坂に登り立ちて、ねもごろに歎かして、あづまはやとのりたまひき。故、其の國をあづまとはいふなり。

即ち其の國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮に坐しましける時に歌ひたまはく、

筑波を過ぎて 幾夜かねつるにひばり

こゝに其の御火焼の老人、御歌を續ぎて、

夜には九夜 日には十日を

とぞ歌ひける。こゝをもて、其の老人を譽めて、東の國造にぞなしたまひける。

其の國より科野國に越えまして、科野の坂の神をことむけて、尾張國に還り來まして、其の御刀の草薙劔を、美夜受比賣の許に置きて、伊吹の山の神をとりいでましき。

木更ノ杉三ツ油ヲ物トス

能煩野
現三重縣鈴鹿
郡に在つた野

三重の勾りなして、いたく疲れたりと詔りたまひき。故、そこを
三重といふ。

そこよりいでまして、能煩野に到りませる時に、國思ばして
歌ひたまはく、

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣山
隠れる 倭は うるはし

また、

平群の山
現奈良縣生駒
郡の山地とい
ふ

命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の
隱白禱が葉を 警華に挿せ その子
此の時御病にはかになりて、即ち崩りましぬ。かれ驛使を
たてまつりき。
こゝに倭に坐す后、また御子たち、諸下りきまして、御陵を作

河内國の志幾
現大阪府中河
内・南河内兩
郡の内かとい
ふ

りて、そののなづき田にはらばひもとほりて、哭かしたまひき。
こゝに八尋白智鳥になりて、天に翔りて、濱に向きて飛びい
ましぬ。かれ、其の後また御子たち、其の小竹の刈杖に足躰り
破るれども、其の痛きをも忘れて、哭くく、追ひいでましき。
故、其の國より飛び翔りいまして、河内國の志幾に留りまし
き。故、そこに御陵を作りて、鎮まりまさしめき。其の御陵を
白鳥の御陵とぞいふ。然れども、またそこより更に天翔りて
飛びいましぬ。

(古事記)

古事記
三卷
國初から推古
天皇に至る間
の神話・傳説・
歴史を記録し
た書
和銅五年(一
三七二)撰進
撰者太安萬侶

四 萬葉集抄

近江の荒都を過ぐる時

よめる歌

柿本人麿

玉櫛 畝火の山の 樞原の 日知の御代ゆ
 生れましし 神のことごと 樛の木の いや
 つぎつぎに 天の下 知ろしめしし 天に
 大和をおきて あをによし 奈良山を
 越え いかさまに おもほしめせか 天離る
 ひなにはあれど 石走る 近江の國の ささ
 なみの 大津の宮に 天の下 知ろしめしけ

万葉集 二十卷
 奈良朝時代に
 成つた歌集
 撰者未詳
 近江の荒都
 大津の都
 天智天皇の皇
 都
 柿本人麿
 藤原朝の廷臣
 畝火の山
 畝傍山
 玉櫛
 樛
 天に
 天離る

む すめろぎの 神の尊の 大宮は ことごと
 聞けども 大殿は ことといへども 春草の
 茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる もも
 しきの 大宮處 見れば悲しも 春の霧の
 反歌

ささなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の
 船待ちかねつ
 ささなみの志賀のおほわだ淀むとも昔の人に
 またも逢はめやも

不盡山を望める歌

山部 赤人

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き

志賀の辛崎
 現滋賀郡下坂
 本村の湖濱
 志賀のおほわだ
 琵琶湖
 不盡山
 富士山
 山部 赤人
 奈良朝初期の
 官人

反歌
 不盡山を望める歌
 山部 赤人

反歌
 不盡山を望める歌
 山部 赤人

駿河
現靜岡縣の内

田兒の浦
現同縣富士郡
の海濱

山上憶良
筑前守
天平五年(一
三九三)歿
年七十四
羅睺羅
釋迦の子

駿河なる ぶじの高嶺を 天の原 ふりさけ
見れば 渡る日の 影もかくろひ 照る月の
光も見えず 白雲も い行き憚り 時じくぞ
雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ
ぶじの高嶺は

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞぶじの
高嶺に雪はふりける

子等を思ふ歌

山上憶良

釋迦如來金口に正しく説き給はく等しく
衆生を思ふこと羅睺羅の如しと。又説き

給はく愛は子に過ぎたるは無しと。至極

の大聖すらなほ子を愛しむ心あり。まし

て世間の蒼生誰か子を愛しまざらめや。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして

しぬばゆ いづくより 來りしものぞ まな

かひに もとなかかりて 安寝しなさぬ

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめ

や 柿 本人 麿

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれ
ば月かたぶさぬ

秋の野に...
かき...
...

あか...
...

...

平安朝の歴史

陽九踏也

五 平安京

藤岡作太郎

藤岡作太郎
 號は東圃
 國文學者
 文學博士
 東京帝國大學
 助教授
 金澤市の人
 明治四十三年
 歿 年四十一
 平安京
 現京都市の古
 稱
 桓武天皇の延
 暦十三年(一
 四五四)から
 明治二年(二
 五二九)まで
 の皇都

平安朝の歴史殊にその文藝の歴史は、全國の歴史にあらざ
 して、たゞ京都の歴史なり。平安京裏の貴族は安逸に馴れ、懦
 弱に流れ、京都のうちに^{可憐}踟躇して身心を活潑に使役するを欲
 せず、公事^{公事}供養にあたら日を費して實務を執るを卑しみ、地方
 の施政の如きは毫も意に介せず、國郡睽離^{睽離}の形勢は年々に進
 み行けども、知らず顔に一時の安を帝都に貪りぬ。都鄙^{都鄙}の關
 係かくの如く薄くして、しかも文學はたゞ都人の文學なり。
 地方を度外に置くを欲せざるものも、わが平安朝文學の研究
 に於ては、勢ひ、しかせざるを得ず。

建國以來歴代の天皇、多くは代を改むる毎に宮城をも遷し

七代
 元明・元正・
 聖武・孝謙・
 淳仁・稱徳・
 光仁の七天皇
 桓武天皇
 第五十代
 山背國乙訓郡長
 岡
 現京都市乙訓
 郡向日町及び
 乙訓・新神足
 兩村の地
 淀川
 現大阪市を貫
 流して大阪灣
 に注ぐ
 和氣清麿
 奈良・平安兩
 朝時代の功臣
 延暦十八年歿
 年六十七

給へり。されど時勢の進歩し、都民の増加するに隨ひて、漸く
 簡易なる遷都は實行しがたきに至り、あをによし奈良の都は
 咲く花とにほひて、こゝに七代七十餘年を経たり。桓武天皇
 の御代には、住みなれし都城も不便少からねばにや、こゝにま
 た遷都の議は動きぬ。延暦三年、地を山背國乙訓郡長岡に相
 して新都の造營を^切めしが、その地淀川に近く、舟楫の便あり
 とはいへ、面積狹隘にして萬年の帝都に適せず、更めて和氣清
 麿の奏議により、少しく東北に進みて、葛野郡宇太の地を占す。
 延暦十三年、盛儀を具へて新營の都に遷幸あり。詔して宣は
 く、この國山河襟帶、自然に城を成す。この形勝によりて、山背
 國を改めて山城國となすべし。子來の民、謳歌の輩、異口同辭
 に號して平安京といふ。今これに従ふべしと。これより新

京の東端に沿うて、鴨川の流れ、糺の川合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂川・大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく、また南に向かふ。二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山の中にこもりて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配や、急なれば、蘆間に出て入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、こゝちよ

からぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして、清き京都は益、清かりしなり。

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずして明らかなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり。電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて、凄じかりき。か

下京
ほゞ現京都市
下京區の地

山
向うに寝たる東
蒲團著て寝た
る姿や東山
(服部風雪)

くの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見
ることを得ざりき。されど、下京より吉田に通ひたる朝な朝
なの景色の、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞
に、三條の大橋の擬寶珠の、一つく彼方へくと薄くなりて、
向うに寝たる東山はあるかなきかの夢よりいまだ覺めやら
ず。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣
る乙女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色
の、またよその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く
光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲
つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、い
つしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。
かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

温帶の地といへども、大陸の内部は寒氣凜々たる冬期は直
ちに烈日赫々たる夏期となり、氣候激變して、その間に和煦の
時期を見ず。海岸は温暖なるところ多きかほりには、年中春
の如く秋の如くにて、夏冬の峻酷なる風物を感じず。四季交
代の順序の明らかなることわが國の如きは少く、わが國にて
も、花も紅葉もなき浦曲などは、到底京都の四季のながめの面
白きにしかず。春立つと思ふばかりに、四方の山々霞こめ、空
の色、水の色さへ昨日に變りて覺ゆ。若菜つみ小松引くも、新
しき年のしるしなり。梅の花散りて、鶯老を啼けば、柳の緑、桃
の紅、花の音信あわたしく、夢かとはかり青葉となりぬ。垣
の卵の花、花橘を過ぎがてにする郭公の、しばらくして聲もせ
ずなりぬるは、時知りぬるとわけてめでたし。五月雨に軒の

卵の花
つみ小松
引くも
新しき年
のしるし
なり
梅の花
散りて
鶯老を
啼けば
柳の緑
桃の紅
花の音
信あわ
たしく
夢かとは
かり青
葉となり
ぬ垣の
卵の花
花橘を
過ぎが
てにする
郭公の
しばらく
して聲も
せずなり
ぬるは
時知り
ぬると
わけて
めでたし
五月雨
に軒の

名越の被

國語 卷九

四

玉水ひまなく、公事物詣でも途絶えがちなるに、晴るればやがて暑さの凌ぎ難き、それも一時、名越の被に夏も終りぬ。冷風立ちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千草、蟲の聲々、月影さへも隈なくて、とりとゝなる物の哀はこの頃ぞまさされる。千入に染むる紅葉を秋の名残として、木がらし騒がしく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて、早くも年は暮れゆきぬ。

愛すべき山川の懐に涵養せられたるわが國民は、永く薰育の恩を忘れずして自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと、平安朝の如く著しきはあらざるべし。代々の撰集の部を分かつや、四季は最も重んぜられたり。花や、月や、その折々毎に合奏歌合はせは絶えず。この時代より盛なりし五節句も、起源は多く支那にあるべしといへども、よ

淀野
現京都府久世
郡淀町附近一
帯の低濕地と
いふ

く國風に融化し、またよく季節に調和したる遊樂なり。白馬の節は勇ましく神々しく、曲水の宴の上巳の節となりたるもやさしく、端午の第一に盛にして、淀野に引きし菖蒲の根を競ひ、軒に蓬を葺けば、藥玉の簾にかゝりたるも興あり。七夕の空澄み渡る頃、銀河を隔つる二星を仰ぎ、重陽には菊花の秋に驕れるを愛して、吟誦夜を覺えず。近世に至りて、算盤弾く丁稚、剃刀片手の下剃までが、「梅咲くや」「初雪や」など首をひねるは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、また一は千年以前の祖先が、深く四季折々の景色に憧憬せし結果なりといはざるべからず。

社會の進歩するに隨うて、人工を以て自然に反抗する力は増加す。これやがて文化の恩澤なり。今日、開明の民は、煉瓦

五平安京

七

culture

の家屋風もすかさず、室内の煖爐春とこしへなれば、何處にか北風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き所、海岸風涼しき所に暑さを避く。都會の住居軒たち續きては、月の盈ち虧け星影の動くも氣づかず。

平安朝の京都は、いまだかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず、隨うてその住民も人爲の力を以て自然を左右せんとするほどの欲望を有せずして、却つて山川の美に憧憬せる本性は、あくまでこれに同化せんと試み、服飾の色彩、第宅庭園の配置、一に模範を自然に取る。平安人士の行動のいかに美はしく、平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然を己が用に供せしむるは、彼等の事にあらず。自然は人間に近づかずし

て、人間は自然に近づけり。彼等は工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、たゞ自然に屈從せり。屈從せるにあらず、愛著せるなり。その愛著せるや、勞働に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿雲客、生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京都の地勢にも不足を感じず、たゞ景色の美にあこがれて、烏兔勿々四百年、政治の實力はいつしか出でて關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして風流の地なり。平安朝は實務の時にあらずして風流の時なりき。

(國文學全史)

かぐや姫
竹取の翁が竹
の中から見出
した姫

六 かぐや姫

春の初より、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、月の顔見るは忌むことと制しけれども、ともすれば、人まには月を見ていみじく泣き給ふ。

七月なつの望の月に出で居て、せちにも思へるけしきなり。

ちかく使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この比となりては、たゞ事にも侍らざぬ。いみじくおぼし歎く事あるべし。よくよく見奉らせたまへといふを聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて、月を見給ふぞ、うましき

竹取の翁
讃岐の造磨

かぐや姫

世にといふ。かぐや姫、月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふものをか歎き侍るべきといふ。かぐや姫のある處にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる」といへば、「翁、月を見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ」といへば、「いかでか月を見ずてはあらむとて、なほ、月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕暗には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々、はうち歎き泣きなどす。これを使ふ者ども、なほ物思す事あるべし」とさ、やけど、親を始めて何事とも知らず。八月はつの望ばかりの月に出で居て、かぐや姫といいたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親ど

もも、何事ぞと問ひさわぐ。かぐや姫泣くくいふ、さきくも申さむと思ひしかども、かならず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりければ、この月の望に、かの本の國より、迎へに人々まうで來むず。さらずまかりぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなりといひて、いみじう泣く。翁、こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさはせしを、我が丈たち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむやといひて、我こそ死なめとて、泣きののし

ることいと堪へがたげなり。かぐや姫のいはく、月の都の人にて父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、かくこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおぼえず。こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど、己が心ならず罷りなむとするといひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年比ならひて、立別れなむことを、心ばへなどあてやかに美しかりつることを見ならひて、戀ひしからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

この事を帝きこしめして、竹取が家に御使遣はさせ給ふ。かの望の日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人を

さして、六衛の司合はせて、二千人の人を竹取が家に遣はす。
家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多
かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々
も弓箭を帶して居り。母屋の内には女共を番にすゑて守ら
す。姫塗籠の内にかぐや姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸
をさして戸口に居り。翁のいはく、かばかり守る所に、天の人
にもまけむやといひて、屋の上に居る人々にいはく、つゆも物
が空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、かばか
りして守る所に蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して外にさら
さむと思ひ侍るといふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。
これを聞きて、かぐや姫は、さし籠めてまもり戦ふべきしたく
みをしたりと、あゝの國の人をばえ戦はぬなり。弓箭して射

られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆あきな
むとす。相戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ
人よもあらじ。翁のいふやう、御迎へに來む人をば、長き爪し
て眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さむ。
さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ
と腹立ち居り。

かぐや姫いはく、聲高にな宣ひそ。屋のうへに居る人ども
の聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを思ひも知
らで、罷りなむずることの口惜しう侍りけり。ながき契のな
かりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るな
り。親たちのかへりみをいさゝかだに仕う奉らで、罷らむ道
も安くもあるまじきに、月比も出で居て、今年ばかりの暇を申

しつれど、更に許されぬによりてなむかく思ひ歎き侍る。御心をのみ惑はして去りなむ事の悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人はいと清らにて、老いもせずなむ思ふこともなく侍るなり。さる所へ罷らむずるもいみじくも侍らず、老いおとろへ給へる様を見奉らざらむこそ戀ひしからめといひて泣く。翁、胸いたきことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にもさはらじとねたみ居り。

かゝる程に、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝の明さにも過ぎて光りたり。望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りており来て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝや

うにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてむとすれども、手に力もなくなりて、痿え屈まりたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外さまへいきければ、あれも戦はで、心地たゞしれに、しれて守りあへり。

立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と覺しき人、家に造磨まうで來といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時の程とて降ししを、そこらの年比、そこらの金たまひて、身をかへたるが如くなりたり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬ

れば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。また他處こゝにかぐや姫と申す人ぞおはしますらむといふ。「こゝにおはするかぐや姫は、おもき病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返り事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざかぐや姫、穢あはれき所にいかで久しくおはせむ」といふ。立て籠めたる所の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくしてあきぬ。姫抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。えとどむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

天人の中にもたせたる宮あり。天の羽衣入れり。又あるは不死の薬入れり。ひとりの天人いふ、壺なる御薬奉れ。穢

竹取物語
二卷
平安朝初期に
成つた物語
作者未詳

き所のものきこしめしたれば、御心地あしからむものぞとて、持てよりたれば、聊かなめ給ひて、少しかたみとて、ぬぎおく衣に包まむとすれば、ある天人包ませず、御衣を取り出でて著せむとす。その時にかぐや姫、暫し待て」といひて、衣著つる人は心おもことんになるなり。物一言いひおくべき事あり」といひて文かく。天人、おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫、物知らぬことな宣ひそとて、いみじく静かに、おほやけに御文奉り給ふ。御文に壺の薬そへて、頭の中將を呼び寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣著つる人は、物思ひもなくなり、にければ、車にのりて百人許り天人具して昇りぬ。

(竹取物語)

七都鳥

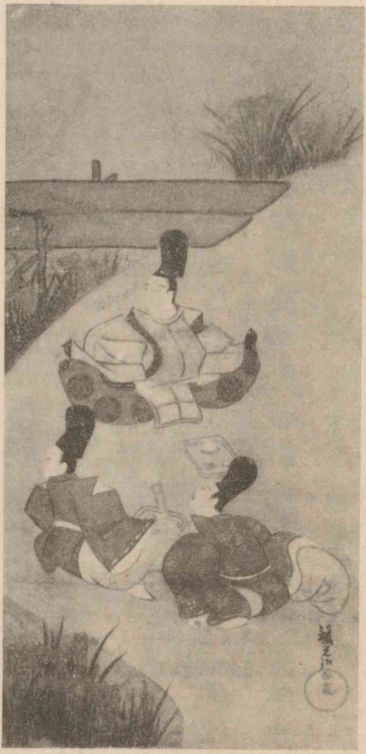
昔男ありけり。その男身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。

三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その澤の邊の木の蔭におりて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心をよめ」といひければよめる。

三河國八橋
現愛知縣碧海
郡知立町八橋
附近

唐衣着て
訓め

からころもきつつなれにしつましあればはるばる來ぬるたびをしぞ思ふ
とよめりければ、みな人、餉の上に涙落してほとびにけり。



橋 八 (筆琳光形尾)

宇津の山
現靜岡縣安倍
志太兩郡の界
に在る

する道は、いと暗う細きに、葛かへではしげり、物心ほそく、すゝろなるめを見ることがと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道はいかでかいます」といふを見れば、見し人なりけり。京にそ

比叡の山
 比叡山
 現京都府と滋賀縣との界に在る
 海拔八四八米
 武藏國
 現東京府及び埼玉・神奈川兩縣の内
 下總國
 現茨城・千葉兩縣の内
 隅田川
 古くは利根川の下流で武藏と下總との國界をなした川今は荒川の下流
 現東京市内を流れて東京灣に注ぐ

の人の許にとて、文書きてつく。
 駿河なるうつ山の山邊のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり
 富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降り。時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのかまだらに雪の降るらむ
 その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、形は鹽尻のやうになむありける。
 なほ行きく、武藏國と下總國とのなかに、いと大きな川あり、それを隅田川といふ。その川の邊に思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡し守「はや舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむとするに、

名りおふ

惟喬親王
 文德天皇の第一皇子
 寬平九年（一五五七）薨御年五十四
 山崎
 現京都府乙訓郡大山崎村
 水無瀬
 現大阪府三島郡島本村廣瀬右のうまのかみ
 右馬頭
 在原業平
 平城天皇の皇孫
 右近衛權中將
 藏人頭
 元慶四年（一五四〇）歿
 年五十六

みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き鳴の大ききなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡し守に問ひければ、これなむ都鳥といふを聞きて、
 名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人
 ありやなしやと
 とよめりければ、舟こそりて泣きにけり。
 昔、惟喬親王とまをす皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛りにはその宮へなむおはしましける。その時、右のうまのかみなりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりけり。

本気
狩

交野
現大阪府北河
内郡枚方・殿
山兩町及び山
田・川越兩村
の野
渚の院
現殿山町渚に
在った

ればその人の名忘れにけり。狩は懇にもせて、酒をのみ飲み
つゝ大和歌にかゝれりけり。今、狩する交野の渚の院、その櫻
ことにおもしろし。その木の下におりゐて、枝を折りて挿頭
にさして、上中下みな歌よみけり。うまのかみなりける人の
よめる。

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころは
のどけからまし

となむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれうき世にな

にかひさしかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。

かくしつゝ、まうで仕うまつりけるを、おもひの外に御髪お

小野
現京都市左京
區上高野小野
町

伊勢物語
在五中将日記
ともいふ
一卷
平安朝初期に
成った物語
作者未詳

ろさせ給うてけり。正月に拜み奉らむとて小野にまうでた
るに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうで
て拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、
やゝ久しく侍ひて、古へのことなど思ひ出でて聞えけり。さ
ても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍
はで、夕暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけ
て君を見むとは

とてなむ泣くく來にける。

(伊勢物語)

ふれ二二二二

この国

20

飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして舟人の詠める歌

見わたせば松のうれごとに住む鶴は千代のど

ちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、ところを見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに、山も海もみな暮れ夜

更けて、西東も見えずして、天氣のこと楫取の心に任かせつ。

男もならはぬはいとも心細し。まして女は、舟底に頭をつき

當ててねをのみぞ泣く。かく思へば、舟子楫取は、舟唄うたひ

て、何とも思へらず。

十六日
二月十六日

十六日、今日のようにさつ方京へ上るついでに見れば、山崎の
小櫃の繪も、まがりのほらのかたも變らざりけり。賣り人の

心をぞ知らぬとぞいふなる。

郷原

かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじしたり。必ずしもあ

るまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はと

かくありける。これにも返りごとす。夜になして京には入

らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川月の明きに

ぞ渡る。人々の云はく、この川飛鳥川にあらねば、淵瀬更に變

らざりけりと云ひて、或人の詠める歌

ひさかたの月に生ひたる桂川底なる影もかは

らざりけり

また或人の云へる。

あま雲のはるかなりつる桂川袖をひでて、もわ

たりぬるかな

久方 望園 柳 松原

また或人詠めり。

ふかさりうみ

桂川わが心にもかよはねどおなじふかさにな
がるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてく
れば處々も見えず。京に入り立ちてうれし。

家に到りて門に入るに、月明ければ、いとよく有様見ゆ。聞
きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を
預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひ
とつ家のやうなれば、望みて預れるなり。さるは、たより毎に、
物は絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にもものもい
はせず。いとほつらく見ゆれど、心ざしはせむとす。
さて池めいて窪まり、水づける所あり。ほとりに松もあり

土佐日記
一卷
平安朝初期に
成つた最初の
假名文日記

き。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなり
けり。今生ひたるぞ交れる。おほかたの、皆荒れはたれば、あ
はれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀ひしきがう
ちに、この家にてうまれし女子の諸共に歸らねば、いかゞは悲
しき。舟人もみな子たかりての、しる。かゝるうちに、なほ
悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人々いへりける歌、
うまれしも歸らぬものをわが宿に小松のある
を見るがかなしさ
とぞいへる。

忘れ難く、くちをしきこと多かれど、えつくさず。とまれか
うまれとくやりにむ。

(土佐日記)

九 古今集抄

古今集
古今和歌集
二十卷
勅撰集の第一
延喜五年(一
五六五)撰進
撰者紀貫之外
三人

紀貫之

袖ひぢてむすびし水の凍れるを春立つ今日の

風や解くらむ

白露も時雨もいたくもるやまは下葉残らず色

づきにけり

凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香

やは隠るる

浦山

凡河内躬恆
古今集の撰者
和泉權掾
醍醐天皇の御
代頃の人

道
古今集の撰者
大内記
醍醐天皇の御
代頃の人

紀友則

紀友則

道知らばたづねもゆかむもみぢ葉をぬさと手

向けて秋はいにけり

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅と

わきて折らまし

五月雨に物思ひをれば時鳥夜深く鳴きていづ

ち行くらむ

壬生忠岑

秋の夜の露をば露とおきながら雁のなみだや

野べをそむらむ

野々 野々人 野々
昔 昔 昔

讀人しらず

春日野

現奈良市奈良

公園の一部

春日山西麓の

野

飛火

春日野の西隅

の夜の月

在原業平

六歌仙の一

春日野の飛火の野守出でて見よいま幾日あり
て若菜摘みてむ
白雲に羽うちかはしとぶ雁の數さへ見ゆる秋
の夜の月

在原業平

（今も所報りる）

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端にげ
て入れずもあらなむ
つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふ
とは思はざりしを

僧正遍昭

俗名良岑宗貞

桓武天皇の皇

孫

六歌仙の一

寛平二年（一

五五〇）歿

僧正遍昭

藤原敏行

右兵衛督

醍醐天皇の御

代頃の人

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音に
ぞ驚かれぬる

坂上是則
加賀介
醍醐天皇の御

代頃の人

吉野の里

現奈良縣吉野

郡吉野町附近

一帯の地

坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降
れる白雪

一〇 須磨の秋

紫式部

紫式部
藤原爲時の女
一條天皇の中
宮に仕へた
長和五年(一
六七六)歿
年三十九
須磨
現神戸市須磨
區の内
心づくしの云々
木の間より漏
りくる月のか
げ見れば心盡
くしの秋は來
にけり
(古今集)
行平の中納言
在原行平
業平の兄
關吹き越ゆる
旅人は袂涼し
くなりけり
關吹き越ゆる
須磨の浦風
(續古今集)

須磨にはいと心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕淨くばかりになりけり。琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、弾きさし給ひて、

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたよ
り風や吹くらむ

千枝・常則
共に當時の繪
師

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれど、あいなる起きあつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。げに、いかに思ふらむ、我が身ひとつにより、親はらからかたとき立離れがたく、程につけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戯れ言うち宣ひ紛らはし、つれづれなるまゝに、いろ／＼の紙を繼ぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様なる唐の綾などに、さまざまの繪どもを畫がき、さび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を、遙かに思ひやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゞすまひ、二なく書き集め給へり。この頃の上手に、すめる千枝常則など召して、作繪仕う奉らせば

我 中 尾



源氏物語

やと心もとながりあり
 懐かしうめでたき御有様に世の物思ひ忘れて近う馴れ仕
 う奉るを嬉しきことにて四五人ばかりぞつと侍ひける。前
 栽の花いろく咲き亂れおもしろき夕暮に海見やらるゝ廊
 に出で給ひて佇み給ふ御様のゆゑしう清らなるに所がらは
 ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかな
 る紫苑色など奉りてこまやかなる御直衣帯しどけなくうち
 亂れ給へる御様にて釋迦牟尼佛弟子と名のりてゆるゝかに
 讀み給へるまた世に知らず聞ゆ。沖より舟どものうたひの
 のしりて漕ぎ行くなども聞ゆ。ほのかにたゞ小さき鳥の浮
 かべると見やらるゝも心細げなるに雁の連ねて鳴く聲楫の
 音にまがへるをうちながめ給ひて御涙のこぼるゝをかき拂

思下 思下

二千里外云々
 三五夜中新月
 色。二千里外
 故人心。
 (白樂天)
 源氏物語
 五十四帖
 平安朝中期に
 成つた物語

ひ給へる御手つき黒木の御數珠に映え給へるは故郷戀ひし
 き人々の心みな慰みにけり。
 月のいとはなやかにさし出でたるに今宵は十五夜なりけ
 りと思し出でて殿上の御遊こひしく月の顔のみまもられ給
 ふ。二千里外古人心と誦じ給へる例の涙も止められず。夜
 更け侍りぬと聞ゆれどなほ入り給はず。

(源氏物語)

二 春は曙

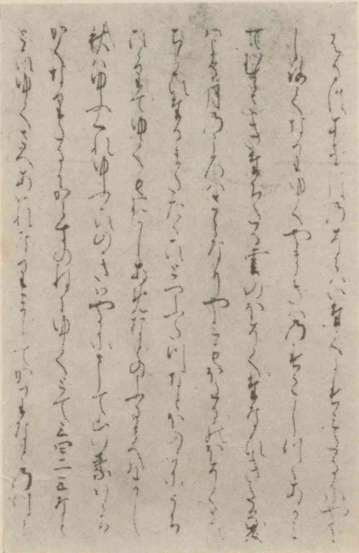
清少納言

春は曙。やうくしろくなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきなくし。晝になりて、ぬるくゆ

清少納言
清原元輔の女
一條天皇の皇
后に仕へた

るびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉、まだ繁うはなう



枕草子古寫本

て、若やかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空の氣色の、何となくそゞろにをかしきに、すこし曇りたる夕つ方、夜など、忍びたる時鳥の、遠う虚耳かと思ゆるまで、たどしきを聞きつけたらむ、何心地かはせむ。祭近くなりて、青朽葉・二藍などの物どもおし巻きつゝ、

ふなるべし。身ぶるひをし、頭振り、口脇をさへ引垂れて、わらはべの、こふどのに参りてなど、謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身の上なげき、人の上いひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば、怨じそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。物語などするに、さし出でて、われひとりさいまくる者。すべてさしいでは、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などす

るに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠のはしりありく、いとにくし。あからさまにきたる兒ども、わらははべをらうたがりて、をかしき物など取らするに、ならひて、常に來て居入りて、調度やうち散らしぬるに、今まゐりのさし越えて、物知り顔に教へやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。はなひて誦文する人。おほかた家の男しうならでは、高くはなひたるもの、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたにをどりありきて、もたぐるやうにするよ。また、犬のもろ聲に長々と鳴きあげたる、まがしくにくし。

(枕草子)

枕草子
三卷・五卷又
は七卷
平安朝中期に
成った隨筆

菅原のおとゞ
菅原道眞
右大臣
延喜三年(一
五六三)歿
年五十九
醍醐のみかど
醍醐天皇
第六十代
時平のおとゞ
藤原時平
左大臣
延喜九年歿
年三十九

昌泰四年
一五六一
醍醐天皇の御
代

② 一二 菅原のおとゞ

醍醐のみかどの御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若うておはします。菅原のおとゞ右大臣の位にておはします。その折、みかど御年いと若くおはします。左右の大臣に世の政おこなふべき宣旨くださしめ給へりしに、その折、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけむ、ともに世の政をせしめ給ひし間、右大臣はさへも世にすぐれ、めでたくおはしますし、御心おきても殊の外に賢くおはしますし、左大臣は御年も若く、さへも劣りたまへるによりて、右大臣の御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、右大臣の御爲に、よからぬこと出て来て、昌

泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流され給ふ。

このおとゞ、子ども數多おはせしに、女君たちは壻どり、男君たちは、皆程々に位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむと公も許さしめ給ひしぞかし、かたぐいにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じ

こちふかばにほひおこせよ梅のはなあるじな

しとて春をわするな

又、亭子のみかどに聞えさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑となりはてぬ君しがらみ
になりてとどめよ

亭子のみかど
宇多法皇
第五十九代

無き事によりて、かく罪せられ給ふを、かしこく思し歎きて、
やがて山崎にて出家せしめ給ひて、都遠くなるまゝに、あはれ
に心ぼそく思されて、
君が住むやどの木末をゆくゆくもかくるるま

でにかへりみしはや

又播磨の國におはしまし著きて、明石のうまやといふ所に御
やどりせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へるけしきを御覽
じて、作らせ給へる詩、いとかなし。

驛長莫驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、ものあはれに心ぼそく思
さる、ゆふべをちかたに所々煙たつを御覽じて、
夕されば野にも山にもたつけぶりなげきより

大化一錦念

播磨の國
現兵庫縣の内
明石
現同縣明石市

こそもえはじめけれ

又、雲の浮き漂ふを御覽じて、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげみるとき
はなほたのまれぬ

さりともと世を思されけるなるべし。月のあかきに、

海ならずたたへる水のそこまでも清きこころ

は月ぞ照らさむ

げに月日こそ照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします處の御門、固めておはします。大貳のゐ

どころ、遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じ

やられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の

聲を聞き召して作らせ給へる詩ぞかし。

觀音寺
觀世音寺
現福岡縣筑紫
郡水城村に在
る天台宗の名
刹

敬するにあらざる

都府樓 現同村に在つた太宰府廳の建物

文集 白氏文集 七十一卷

白居易 號は樂天 支那唐代の詩人

皇紀一五〇六年 遺愛寺

香爐峯の北側に在つたといふ

香爐峯 現中華民國江西省九江縣に在る廬山の一峯

みかど 醍醐天皇

都府樓纔看瓦色。 觀音寺、只聽鐘聲。
これは文集の白居易の遺愛寺鐘敲枕聽香爐峯雪撥簾看といふ詩に、まささまに作らしめ給へりところ、昔の博士ども申しけれ。

又かの筑紫にて、九月十日、菊の花御覽じける序でに、いまだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとゞの作らしめ給へりける詩を、みかどかしこく感じ給ひて御衣を給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽するに、いとゞその折思し召しいでて、作らしめ給ひける。

去年、今夜侍清涼。 秋思、詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。 捧持、毎日拜餘香。
この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

秋思の詩題で、此處に「思」の字あり

後集 菅家後集 一卷

北野 現京都市上京區の内

北野の宮 北野神社 現同區馬喰町に在る官幣中社

安樂寺 現筑紫郡太宰府町に在つた

今同所に官幣中社太宰府神社が在る

大鏡 世繼物語ともいふ

八卷 平安朝末期に成つた歴史物語 作者未詳

火雷天神

このことどもたゞ散りく^{はら}なるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書きて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。又、折々の歌を書きおかせ給へりける、自ら世に散り聞えしなり。又、雨のふる日、うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなれば、や著てし濡衣 天のト
ひるよしもなき 雨のト
やがて、かしこに失せ給へる。 夜のうち、この北野にそこ

らの松をおほし給ひて、渡り住み給ふをこそは、只今の北野の宮と申して、公も行幸せしめさせ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。筑紫のおはしましし處は、安樂寺といひて、公より別當所司などなさせ給ひて、いとやむことなし。

ふの事勢とて、
(大鏡)

三塔
東塔
西塔
横川

源信僧都
俗姓卜部
天台宗の高僧
他力信仰の開
拓者
寛仁元年（一
六七七）歿
年七十六
母
清原氏
横川ヨカワ
比叡山三塔の
一
大和國葛下郡
現奈良縣北葛
城郡
比叡の山
天台宗の根本
道場
平安朝時代に
於ける教學の
中心地
三條の太後の宮
御諱は昌子
冷泉天皇の皇
后

多武峯の聖人
増賀上人
俗姓楠
比叡山で天台
の學を究め後
名利を厭つて
大和の多武峯
に隠れた
長保五年（一
六六三）歿
年八十七

一三 源信僧都の母

今は昔横川の源信僧都は大和國葛下郡の人なり。幼くして比叡の山に登り、學問してやむごとなき學生になりければ、三條の太後の宮の御八講に召されにけり。

八講畢つて後、賜はりたりける捧物の物共少し分けて、大和國にある母の許に、かくなむ後の宮の御八講に参りて賜はりたる。始めたる物なれば、先づ見せ奉るなりとて遣はしたれば、母の返り事にいはく、「おこせ給へる物共は喜びて賜はりぬ。かくやむごとなき學生になり給へるは限りなく喜び申す。但し、かやらの御八講に参りなどして歩き給ふは、法師になし聞えし本意には非ず。そこにはめてたく思はるらめども、^{おぼ}姫

の心には違ひにたり。姫の思ひし事は、女子はあまたあれど



阿彌陀來來迎圖（傳源信筆）

も男子はそこ一人なり。それを元服をもさせずして、比叡の山に上げたれば、學問して、身の才よくありて、多武峯の聖人の様に貴くて、姫の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それに、かく名僧にて花やかに歩き給ひきたらむ程に、

聖人にして在せむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしかと書きたり。

僧都これを披きて見るにも涙を流して泣く／＼即ち又返り事を遣はしていはく、源信は更に名僧せむの心無し。唯尼君の生き給へる時、かくの如くやむごとなき宮原の御八講などに参りて、聞かせ奉らむと思ふ心深くして、いそぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めてあはれに悲しくて、嬉しく思ひ奉る。然れば仰せに随ひて山籠りを始めて聖人にならむ。今はあはむと仰せられむ時にぞ参るべき。然らざらむ限りは、山を出づべからず。但し、母と申せども、極めたる善人にこそ在しましけれと書きて遣りつ。其の返り事にいはく、今なむ胸落ちるて、冥途も安く覺ゆる。返す／＼嬉しく思ひ聞ゆ。

ゆめ／＼愚かに在すべからずと。僧都これを見て、此の二度の返り事を法文の中に巻き置きて、時々取り出して見つゝぞ泣きける。

かく山に籠りて六年は過ぎぬ。七年といふ年の春、母の許にいひ遣りていはく、六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねば戀ひしくや思し召す。然らばあからさまに詣でむと。返り事にいはく、げに戀ひしくは思ひ聞ゆれども、見聞えむにやは罪は滅びむずる。猶山籠りにて在せむを聞かむのみぞ嬉しかるべき。これより申さざらむ限りは、出で給ふべからずと。僧都これを見て、此の尼君は只人にもなき人なりけり。世の人の母はかくいひてむやと思ひて過す程に、九年になりぬ。

岡崎義惠

國文學者

東北帝國大學

教授

高知市の人

明治二十五年

生

一四 中世の文學

岡崎 義惠

文藝に於ける中世的なものの眞の建設者は僧侶である。武士も無論或點までは參與してゐるが、獨立するだけの力を持たず、僧侶的な動力にすがつて纔かに力を展ばしたものに過ぎない。武士は直接行動に結びつく實踐的意志に於て、嘗て國家の建設に努力した原始人の再來といふに恥ぢないが、此の新たな野人は、爛熟した貴族文化の後を承けて、更にそれを一步押進めて行く道には迷はざるを得なかつた。此の時彼等の缺を補ふべく待ち構へてゐたのは、かの僧侶の一團である。此の階級は、原始時代の終から既に其の實力を培養して來たが、現世的享樂に專念する古典時代に於ては、却つて貴族

のために驅使され、其の本領を没却せんとした。今時代の轉換期に逢つて、彼等は武士が猪突的に開拓した新時代へ己の精神を蒔くことが出來たのである。

僧侶的、或は僧侶的、武士的精神の本領は、簡單にいへば、統一に向かふ渾沌、清澄への努力、崇高の喜、未完成の歎美である。これこそは古典的なるものと根本的に對蹠をなす精神の傾向であつて、いふまでもなく、原始的の復活である。「原始的」は古典時代の中葉に於て、其の生命を失ひ、總べては、滑かな調和の努力を忘れた完成、優婉、典雅のために塗抹されたが、しかも、此の時既に自己の後繼者として、新たな「原始的」を開くべき中世を産んでゐた。古典時代の後半は、「古典的」の降り坂であると共に、「中世的」の歩、一步擡頭し來る時代であつた。中世の此の誕

生を考へるに、それは一面に於て、原始的の其の儘の復活である。武士を中軸とする壯烈果敢意志的明快争闘的混濁本能的素樸は、原始的なるものが、古典時代を通ずる隠忍の後、中世に於て再び捷利の時代を現出したものである。かの壯烈な力の對立を主題とした軍記物の世界は、文藝に於ける其の反映である。此處では英雄的な行動、外發する力の壯大、つまり實踐的生活に直接顯現する力の異常に昂まつた美が關心の中心となり、人間的な力と行動とを超人間的な強烈さに於て見ようとする。これは又妖怪變化鬼天狗其の他の魔物となつて、超現實的な姿にまで昂められ、軍記物や傳説集や謠曲などの中に盛に活躍する。

併しながら、これよりも一層中世の神髓を現す一面は、むしろ

原始的なるものの甚だしく變質された更生である。外に向かふ原始的無限性は内に向かひ、原始的意志は精神内部の問題となり、原始的浪漫的傾向は神祕的となり、太古の神々は人間の形姿を脱して自然の風貌を持ち、自然の神格化は肉體的でなくて心靈的となり、壯大の美は眞に崇高の語によつて呼び得べきものとなり、總べて、力が内面化、心靈化の方向をとる。

これは、思ふに、古典的なるものが其の成立に力を添へてゐるからに相違ない。總べての客觀的な見方を完成し、外面的な美を行く所まで行かしめ、有限世界の支配を終つたと感じた時、古典人は自己の内部に新たな不満と恐怖とを感じ始め、再び原始的なるものの潜在力を自己の中に呼び醒さうとした

が最早外發的な原始的の力は自己の中に完結し銷磨してゐた。それ故に、内面に向かつて力の泉を掘り當てようとする試圖が却つて熾烈となり、佛道の指示する所に随つて、奥へ奥へと憧れ入つたのである。其の徑路は平安朝文藝によく現れてゐる所であつて、現世の美と享樂と營勞とは、遂に其の完成によつて最後の満足齋さず、實はなほ其の先があるといふ考へ方は、物語の人物の心情や和歌の思想に反覆されてゐるものである。併しながら其の理想は、古典人としてはやはり來世の安樂であり、現世と同様の悅樂を今一つ次の世界へ延長しようとするものに過ぎない。或は手取早く、隱遁閑居することによつて、現世に於て豫め其の縮圖を味ははんとするのである。深山に入つて佛道を思惟し、一身を安らかにし

103

ようとする望は、絶えず彼等をそゝのかしてゐた。併し古典人は、それ自身遂に無限と崇高と壯烈と、夢幻にまで押し上げられた世界とを知らないものである。如何に中世的になつても、依然として安樂の世界、それだけで完結した古典的の美の延長としての理想境より外知らなかつた。しかも、唯それを心に描くのみであつて、それを追ひ詰める力の崇高を持つことが出来なかつた。けれども、此の内面の目標を見出したことは古典人の功績である。原始的精神の潜在流が再び勢を得る時、此の目標への崇嚴なる橋梁が忽ちにして積み果ねられて行つたのである。

中世文藝の脊髓としての、内面に向かつて昂められたるもの「心靈の崇高」「幽遠の美」は、宗教と伴なつて顯れるが、固より宗

平家物語
十二卷（流布本）
鎌倉時代初期に成った軍記物語
作者未詳

教其のものでは無く、一種の美の表現である。平家物語は人間社會に於ける調和の美と人情的な感傷心の分析とを離れて、人間の意志欲願の已むべからざる力と、其の上に覆ひかぶさる人力以上の力とを史的現象の底から掘み出し、悲劇的な力の葛藤と、其の葛藤を融かしこむ運命的なるものの存在を指し示す。此の時、固より佛道に歸依し、淨土を欣求する思想感情は、曲中の人物にも、作者の主觀にも現れる。けれども、さういふ宗教的意味に關する事がなくとも、此處には無限の彼方に憧憬して、無邊際にまで昂まつて行く美的情調の、青空の如き靈感がある。あらゆる事件と人物の行動とに伴なつて、内なる力の激しく相撃ち相凌ぎつゝ、しかもなほ總べてこれ等人力の上に凌ぎ出でてこれ等を蔽ふ無限に大なるものの力が

新古今集
二十卷
元久二年
八六五）成
徒然草
二卷
吉野朝時代に成つた隨筆
吉田兼好作

新古今集
新古今和歌集
二十卷
元久二年
八六五）成
徒然草
二卷
吉野朝時代に成つた隨筆
吉田兼好作

が存在する事を感じる時、その愉悅は美なるものである。新古今集の、人間的熱情を撓る無限大の壓力、徒然草の、所願を皆妄想とし、變化不定の生に於ける諸縁を放下して得られる成道の永劫無限のしづかさ、これ等の壓、これ等の寂の無窮の大いさは、あらゆる宗教的、道德的契機に顧慮することなくとも、なほ美としての崇高である。謠曲の如きは厭離穢土、欣求淨土、草木國土一切成佛等の様々な宗教的思想を含み、魔性を克服し、修羅道を脱離し、妄執を斷つて常樂涅槃の寂光土を求め、理想によつて構想を立ててゐるが、常に或無限なるもの、永久なるものへ生命を投げ入れてしまふ時に生ずる崇高感が、藝術的意義の樞軸をなしてゐる。

中世はあらゆる宗教的、道德的思想の交錯混淆した時代で、

神佛の習合の如きは其の著しい現れであるが、總べて精神上の諸要素を綜織し、燃燒して、一元の形而上的世界に向かつて蒸發せしめようとしたものである。中世に於て、内面に昂める精神は、無論佛教的・道教的の側面に限らず、神道の儒教的の側面をも持ち、國家的・政治的・倫理的の方面にも著しい發現を認め得る。軍記物・史論・史話・教訓談・歌論・能樂論等の諸作品に於て、これは準文藝的な形で現れてゐる。中世思潮は、つまり此の混濁を統一せんとして未だ努力の最中にある、苦闘に満ちた、禁欲的行路を進むのであるが、此の努力は享樂的・遊戯や事務的・平靜に反し、未だ實現されざる雛形に肖せて創らうとする、匠と創造との上に立つてゐる。

そして諸種の思潮を轉めて其の上に君臨し、最も根本的な統一の契機となり、特に文藝的美の臺座ともなつたのは、思ふに、佛教的なるものである。涅槃への憧憬によつて最もよく代表される或浪漫的・精神である。これが美として現れ、藝術としての意味を持つ範圍に具體化したものとして、中世風な文藝は見られ得るのである。生命の未だ遂げられざるものとして現れた姿、内面的に異常に強調された世界としての文藝の味が此處にある。これは宋元の思想と相應じ、繪畫に於ける水墨の味とも相通じ、古拙・素樸への復歸が、異常に沈潜せる精神的條件の下に行はれたものであると考へることも出来る。

(日本文藝學)

宋
支那の國號
皇紀一六二〇
—一九三九年

元
支那の國號
皇紀一九三一
—二〇二八年

一五 新古今集抄

後徳大寺左大臣

なごの海の霞のまよりながむれば入日をあら

ふ沖つ白波

皇太后宮大夫俊成

またや見む交野のみの櫻がり花の雪散る春

のあげほの

駒とめてなほ水かはむ山吹のはなのつゆそふ

井出の玉がは

新古今集
新古今和歌集
二十卷
勅撰集の第八
元久二年(一
八六五)撰進
撰者藤原定家
外四人
後徳大寺左大臣
藤原實定
建久二年(一
八五一)歿
年五十三
なごの海
現大阪市の西
南部に當る
皇太后宮大夫俊
成
藤原俊成
元久元年歿
年九十一
井出の玉がは
六玉川の
現京都府綴喜
郡井手町を流
れて木津川に
入る

式子内親王

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかか

る雪の玉水

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひ

ぐらしのこゑ

寂蓮法師

くれてゆく春のみなとは知らねども霞におつ

る宇治の柴舟

さびしさはその色としもなかりけり楨たつ山

の秋の夕ぐれ

式子内親王
後白河天皇の
皇女
建仁元年(一
八六一)薨
寂蓮法師
俗名藤原定長
建仁二年歿
宇治
宇治川
現京都市の南
方を流れる淀
川の一部

藤原定家

俊成の子
新古今・新勅撰集の撰者
權中納言
仁治二年（一九〇一）歿
年八十

藤原定家

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山の
かけはし藤原
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の
秋の夕暮

藤原家隆

新古今集の撰者
宮内卿
嘉祿三年（一八九七）歿
年八十
鳥の海
琵琶湖の古稱

藤原家隆

鴉カラスの海うみや月の光のうつろへば浪の花にも秋は
見えけり
志賀の浦やとほざかりゆく波間より凍りて出
づる有明の月

藤原秀能

和歌所寄人
仁治元年歿
年五十七
難波江
現大阪市の北西部に當る江灣

藤原秀能

夕月夜潮みち來らし難波江のあしの若葉を越
ゆる白波
月すめばよもの浮雲空に消えてみ山がくれを
行く嵐かな

攝政太政大臣

藤原良經
建永元年（一八六六）歿
年三十八

攝政太政大臣

吉野山

現奈良縣吉野郡の南部に横たはる大峯山脈の一支脈
不破の關
現岐阜縣不破郡關ヶ原町に在った

吉野山花のふるさとあと絶えて空しき枝に春
風ぞ吹く
人すまぬ不破の關屋の板廂あれにしのちはた
だ秋の風

一六 光頼卿の参内

光頼卿 藤原光頼 權大納言 當時權中納言・左衛門督 承安三年(一八三三)歿 年五十一 同(き)十九日 平治元年(一一八九)十二月十九日 信頼卿 藤原信頼 權中納言・右衛門督 平治の亂の主謀者 平治元年歿 年二十七

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議として催されけり。勸修寺の左衛門督光頼卿この程は信頼卿振舞過分なりとて不参にておはしけるが、参内して承らんとて、殊に鮮かなる束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傳子の桂の右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束に出でた、せ、自然の事もあらば人手にかな、汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召し具して、大軍陣を張りて所々の門々を堅く守護しけるを事ともせず、前高らかにおはせて入り給へば、兵共も大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

長方卿 藤原長方 光頼の従弟 權中納言 當時參議・左大辨 建久二年(一一八一)歿 年五十三



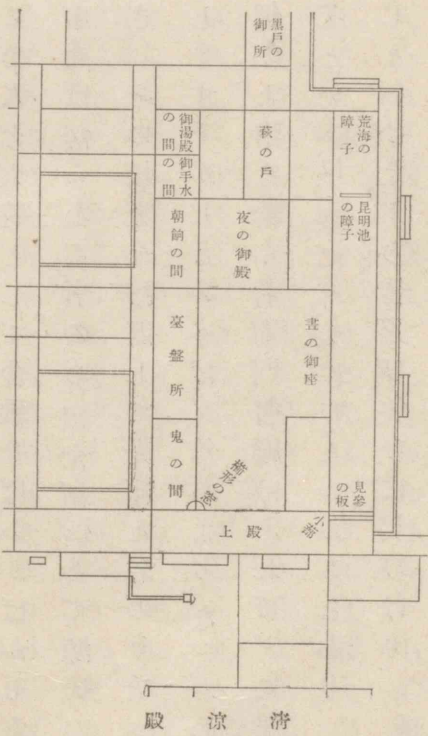
圖 帶 束 官 文

紫宸殿の後を経て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上、藤たち皆下にぞ著かれたる。光頼卿こは不思議のことかな。人は如何に振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものと思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候

惟方
藤原惟方
左兵衛督・檢
非遣使別當

先日
十二月十四日
少納言入道
藤原通憲
法名信西
平治元年歿
神樂岡
吉田山
現京都市左京
區吉田神樂岡
町に在る

が、荒海の障子の北萩の戸のほとりに弟の別當惟方のおはしけるを招きつゝ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間參じたれども、承り定めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてある。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。そのうちに入らんこと甚だ面目なるべし。さて、先日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向かは



勸修寺内大臣
藤原高藤
昌泰三年(一五六〇)歿
三條右大臣
藤原定方
高藤の子
承平二年(一一五九二)歿
延喜
醍醐天皇の御代の年號(一一五六一―一一五八二)

れけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將檢非遣使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふこと、先蹤も未だ聞き及ばず。當時も大きに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならずと宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかばとて赤面せられけり。光頼卿重ねて、こはいかに勅諭なればとて、いかでか存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣三條右大臣、延喜の聖代に仕へてよりこのかた、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝ程のことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語

大貳清盛
 平清盛
 當時大宰大貳
 熊野
 熊野三山
 いづれも現和
 歌山縣東牟婁
 郡に在る
 切目
 現同縣日高郡
 切目村
 和泉
 現大阪府の内
 紀伊
 現和歌山・三
 重兩縣の内
 伊賀・伊勢
 共に現三重縣
 の内
 主上
 二條天皇
 上皇
 後白河上皇
 一本御書所
 内裏と左兵衛
 府との間に在
 った

らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待ち受けて馳せくは、り、大勢にてあなる。信賴卿が語らふところの兵いくばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や、君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはするとこそ聞ゆれ。相構へて、隙を窺ひ、はかりごとをめぐらして、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」上皇は、「一本御書所

溫明殿
 内裏の東門宣
 陽門と綾綺殿
 の間に在った

に。「内侍所は。」溫明殿に。「劔璽はいづこに。」夜の御殿にと、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かうぞ答へられける。又、朝餉の方に人音のし、楡形の穴に人影のしつるは何者ぞと宣へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかげろひ候らんと申されければ、光賴卿聞きも敢へず、世の中は今はいかゞござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には信賴住み、君をば黒戸の御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかゞ守り給ひぬるぞ。異國にはかやうのためしありと雖も、わが朝には未だかくの如きの先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かなとて、のろゝしげに憚る所もなく、どき給へば、惟方は、人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立

許由
支那堯代の高士

たれたれども、且は悲しみて、われいかなる宿業によつてかゝる世に生まれあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れとて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼卿の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出て給ひける。誠に漢朝の許由は、富貴の事を聞きてだに心に厭ひ思ふが故に、悪しき事を聞きたりとして耳を洗ひき。如何に況や此の光頼は、朝家の諫臣として、惡逆無道の振舞を見聞き給ひて、耳目をも洗ひぬべく思ひ給ふぞ理なる。

(平治物語)

平治物語
三卷(流布本)
鎌倉時代初期
に成つた軍記
物語
作者未詳

大原
現京都府愛宕郡大原村

平時侯娘

後白河法皇
建禮門院

後白河天皇

永

北祭

北面

上北面(五位)

下北面(五位)

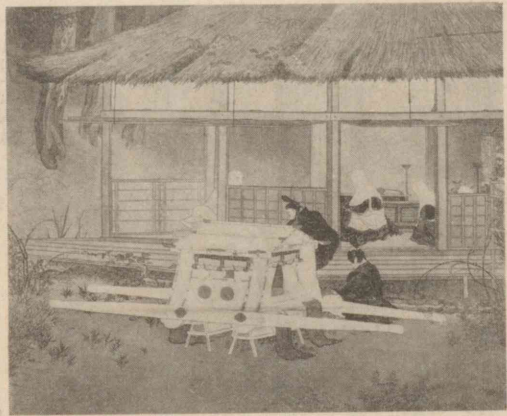
清原深養父
平安朝の歌人
補陀洛寺
現愛宕郡靜市
野村に在つた
小野の皇太后宮
藤原歡子
後冷泉天皇の
皇后

一七 大原御幸

上皇(後白河)の御幸に當りて

かゝりし程に、文治二年の春の比、法皇、建禮門院大原の閑居の御住まひ御覽せまほしう思し召されけれども、きさらぎ彌生の程は、嵐烈しく餘寒も未だ盡きせず、嶺の白雪消えやらで、谷のつら、も打解けず。かくて春過ぎ夏來りて、北祭も過ぎしかば、法皇、夜を籠めて、大原の奥へぞ御幸なる。忍びの御幸なりけれども、供奉の人々は、徳大寺、花山院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬どほりの御幸なれば、彼の清原深養父が補陀洛寺、小野の皇太后宮の舊跡を叡覽あつて、それより御輿に召されけり。遠山に懸る白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる

梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。比は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。



(筆山觀村下) 幸御原大

西の山の麓に、一字の御堂あり。即ち寂光院これなり。古う造りなせる山水木立、由ある様の處なり。葦破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燭を挑ぐ。庭の夏草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草浪に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中

寂光院
現大原村に在
る天台宗の尼
寺
延暦寺の別院

ゆきんがの
入るまふ

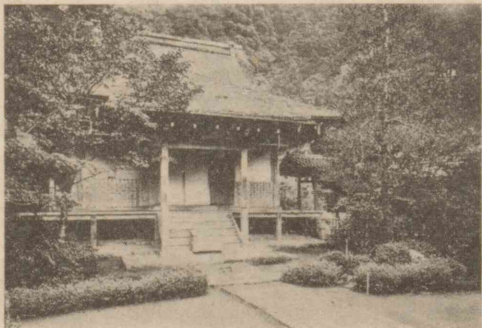
ゆきんがの
ゆきんがの
ゆきんがの

島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの晩櫻初花よりも珍しく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶え間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かうぞ思し召しつゞける。

池水にみぎはの櫻散りしきて
浪の花こそ盛りなりけれ
ふりにける岩の絶え間より落ちくる

水の音さへゆゑびよしある處なり。
緑蘿の垣、翠巖の山、繪にかくとも筆も及びがたし。

女院の御庵室を御覽ずれば、軒には蔦あさかほはひかゝり、しのぶ



院 光 寂


木 蔦

來迎の三尊
 彌陀三尊
 中尊阿彌陀如來・左脇土觀世音菩薩・右脇土勢至菩薩
 普賢
 善薩
 釋迦如來の右脇土
 諸佛の理徳・定徳・行徳を司どる
 善導和尚
 支那唐代の高僧
 支那淨土思想の確立者
 先帝
 安徳天皇第八十一代
 八軸の妙文
 法華經八卷九帖の御書
 善導和尚撰述の觀無量壽經疏四帖その他五部九卷の書

こそおぼえ候へ」とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬ様、目もあてられず。法皇も、されば汝は阿波の内侍にこそあんなれ。今更御覽じ忘れける、唯夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、理にてありけるぞとぞ、各申しあはれける。あなたこそあなたを叡覽あれば、庭の千草露おもく、籬に倒れかかりつゝ、^{おぼ}その小田も水越えて、鳴立つ隙も見え分かず。御庵室に入らせ給ひて、障子を引き明けて御覽ずれば、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲を懸けられたり。左に普賢の畫像、右に善導和尚、並びに先帝の御影を掛け、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。^{蘭麝}蘭麝の匂に引きかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。障子には、諸經の要文ども色

あまのうらやま
 御衣のうらやま

大江定基法師
 法名寂昭
 天台宗の僧
 長保中入宋
 長元七年（一六九四）歿
 清涼山
 五臺山
 現中華民國山西五臺縣に在る

綾羅錦繡


紙にかいて所々におはされたり。其の中に、大江定基法師が清涼山にて詠じたりけん、笙歌遙かに聞ゆ、孤雲の上。聖衆來迎す、落日の前とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、^{朝見}思ひきや深山の奥にすまひして雲井の月をよそに見むとは、さて側を御覽ずれば、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾など懸けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數を盡くしし綾羅錦繡のよそほひも、さながら夢になりにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、各見參らせし事なれば、今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。さる程に、上の山より濃き墨染の衣著たる尼二人、岩のかけ

花筐

鳥飼中納言維實
藤原伊實
永曆元年(一八二〇)歿
五條大納言國綱
藤原邦綱
養和元年(一八四一)歿
大納言佐
平重衡の妻

ぢを傳ひつゝ、おり煩ひ給ひけり。法皇これを御覽じて、あれは何ものぞと御尋ねあれば、老尼涙を抑へて申しけるは、花筐はなかごにかけ、岩躑躅いわたづな取り具して持たせ給ひたるは、女院にて渡らせ給ひ候なり。爪木つめぎに蕨折あざみり具して候は、鳥飼中納言維實の娘五條大納言國綱ごじょうだいなごんくわうの養子やしよ、先帝の御乳人、大納言佐さと申しもあへず泣きけり。法皇も世よに哀れげに思し召して、御涙みたませきあへさせ給はず。女院は、さこそ世よを捨つる御身といひながら、今かゝる御有様を見え参らせんずらん慚づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々毎よよごとの閻伽えんがの水みづ、むすぶ袂たもともしをるゝに、曉あけ起きの袖の上、山路やまぢの露も滋しくして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、御庵室へも入らせ給はず、御涙みたまに咽なばせ給ひ、あきれて立たせましましたる

内侍

花

頭上花葉
腋わき下した汗あせ
衣きぬ裳もも垢あせ賦し
身み矢や威い克く
不ふ果くわ本ほん座ざ

ところに、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。世よを厭いとふ習しゆ、何かは苦くるしう候べき。とくく御對面候うて、還御かへりなし参らせ給へと申しければ、女院御庵室に入らせ給ふ。「一念いっぴんの窓まどの前まへには攝取しゆくの光明くわうめいを期もちし、十念じゆんの柴しばの樞しゆには聖衆しやうじゆの來迎らいごうをこそ待ちつるに、思ひの外おもひの外に御幸ごきやうなりける不思議ふしぎさよとて、御見参ありけり。

法皇、此の御有様を見参らせ給ひて、天人の五衰ごすいの悲しみは人間にも候ひけるものかなとぞ仰せける。女院、御涙を抑へて申させ給ひけるは、かゝる身みになることは、一旦いつぱんの歎なげ申すに及び候はねども、後生ごせい菩提ぼだいの爲ためには悦よろことおぼえ候なり。いつの世にも忘れがたきは先帝の御面影おんおもかげ、忘れんとすれどもわすられず、しのばんとすれどもしのばれず。唯、恩愛おんあいの道程みちかた悲し

惟愛

皇極 皇極の御意

かりけることはなし。されば彼の菩提の爲に朝夕の勤怠ること候はず。これも然るべき善知識とこそおぼえ候へ」と申させ給ひければ、法皇仰せなりけるは、人間のあだなる習は、今更驚くべきにはあらねど、御有様見奉るに、餘りにせん方なうこそ候へ」とて、御涙に咽ばせ給ひけり。

さる程に寂光院の鐘の聲、今日も暮れぬと打ちしられ、夕陽西に傾けば、御名残惜しうはおぼしけれども、御涙を抑へて還御ならせ給ひけり。女院は今更古へを思し召し出でさせ給ひて、忍びあへぬ御涙に、袖の柵塞きあへさせ給はず。遙かに御覽じ送らせ給ひて、還御もやうく延びさせ給ひければ、御本尊に向かひ奉り、先帝聖靈一門亡魂成等正覺頓證菩提と泣く泣く祈らせ給ふこそ悲しけれ。

（平家物語）

三

忠盛早殿
鎌倉時代初期
に成つた軍記
物語
作者未詳

三浦の朝
誠駿

一八 新島守

富士川 現山梨縣に發源し静岡縣を南流して駿河灣に注ぐ
天龍川 現長野縣に發源し静岡縣を南流して遠州灘に注ぐ
君 後鳥羽上皇
宇治 現京都府久世郡宇治町及び宇治郡宇治村附近
勢多 現滋賀縣栗太郡瀬田町及び老上村附近

いつの年よりも五月雨霽れ間なくて、富士川天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬もち渡し難ければ、攻め上る武者どももあやしくなやめり。かゝれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出て立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分かち遣はず。世の中ひびきの、しるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなくさわぎ満ちたり。いかゞあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたる様ども、頼もしげなし。

空行く月日の限り知らずのどけくおはしましぬべかりつる
 世を今はかく花の都をさへたち別れおのがちりく^{いづれに}にさす
 らへ磯の^{舟人}苦屋に軒をならべておのづからこととふものとして
 は浦に釣するあま小舟鹽焼く煙のなびく方をも我がふる里
 のしるべか^{海舟}とばかりながめ過ぐさせ給ふ御すまひどもはそ
 れまでと月日を限りたらんだに明日知らぬ世のうしろめた
 さにいと心細かるべし。まいて何時を果とかめぐり逢ふべ
 き限だになく雲の浪煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡く
 し給ふべき御様ども口惜しといふもおろかなり
 このおはします處は人はなれ里遠き島の中なり。海づら
 よりは少しひき入りて山陰にかたそへて大きやかなる巖の
 そばだてるをたよりにて松の柱に葦ふける廊などけしきば

かよふ海邊國のあまの河月日
 と限らぬあまの心細かるべし
 海舟のあまの御すまひどもは
 らへ磯の苦屋に軒をならべて
 は浦に釣するあま小舟鹽焼く
 煙のなびく方をも我がふる里
 のしるべかとばかりながめ過ぐ
 させ給ふ御すまひどもはそれ
 までと月日を限りたらんだに
 明日知らぬ世のうしろめたさ
 にいと心細かるべし。まいて
 何時を果とかめぐり逢ふべき
 限だになく雲の浪煙の波の幾
 重とも知らぬ境に世を盡くし
 給ふべき御様ども口惜しとい
 ふもおろかなり

かりことそきたり。誠に柴の庵のたゞしばしとかりそめに
 見えたる御宿りなれどさる方になまめかしくゆゑづきてし
 なさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。
 はるく^{いづれに}と見やらるゝ海の眺望二千里の外も残りなき心地
 する今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞しめ
 して、

我こそは新島守よおきの海のあらき波風ここ
 ろして吹け

(増鏡)

増鏡
 三卷・五卷・
 六卷又は十卷
 吉野朝時代に
 成つた歴史物
 語
 作者未詳

柴の庵の云々
 いづくにもす
 まれずばただ
 すまであらむ
 柴のいほりの
 しばしなる世
 に (西行)
 水無瀬殿
 現大阪府三島
 郡島本村に在
 つた離宮
 後鳥羽上皇の
 御造營

増鏡 三卷・五卷・六卷・又十卷
 吉野朝時代ニ成ツタ歴史物語

拔一九 念佛と愛語

念佛

親

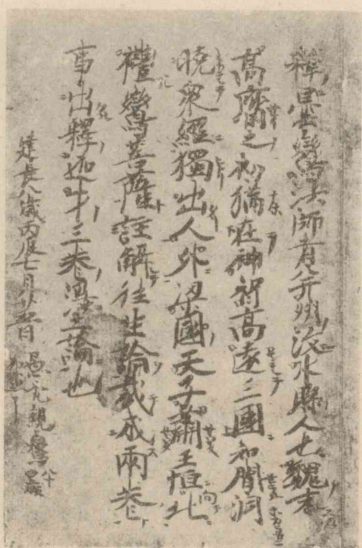
鸞

親鸞 俗姓日野 淨土真宗の開祖
 弘長二年（一九二二）歿 年九十
 南都 主として法相宗三大本山の興福寺をさす
 北嶺 天台宗の總本山延暦寺をさす
 彌陀 阿彌陀佛
 無量壽佛・甘露王如來
 西方淨土の教主

各十餘箇國の境を越えて、身命をかへりみずして、たづね來らしめたまふ御志、ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こゝろにくく思し召しておはしましては、んべらんは、おほきなるあやまりなり。若ししからば、南都北嶺にも、ゆゝしき學生たち、多くおはせられてさふらふなれば、かの人々にもあひたてまつりて、往生の要、よく聞かるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたす

けられまゐらすべしと、よき人の仰せをかうぶりて信ずるほかに、別の子細なきなり。

念佛はまことに淨土に生まるゝ種にて、やはんべるらん、また地獄におつべき業にて



親 やはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ、法然聖人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔

法然聖人 俗姓久米 淨土宗の開祖
 建曆二年（一八七二）歿 年八十

すべからずさふらふ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。詮ずるところ、愚身の信心におきては、かくのごとし。この

歎異抄

一卷

鎌倉時代末期に成つた淨土眞宗の典籍親鸞の法語を本として他力信仰の教旨を説いたもの

道元

俗姓久我

我が國曹洞宗の開祖

建長五年（一一九一）歿

年五十四

夜間珍重
早寢不審

上は念佛をとりて信じたてまつらんとも、また捨てんとも、面の御はからひなり。
(歎異抄)

愛語

道

元

愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、願愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴惡の言語なきなり。世俗には安否をとふ禮儀あり。佛道には珍重のことばあり、不審の孝行あり。「慈念衆生猶如赤子」のおもひをたくはへて言語するは愛語なり。徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし。愛語をこのむよりは、やうやく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろしられずみえざる愛語も現前するなり。現在の

身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし。世々生々にも

善勸坐禅儀

入宋傳法沙門道元撰

原夫道本圓通乎假修謹

宗象日在何費功夫況乎

全體之在焉哉孰信佛之

手段大都不可勝處也且用

修行之脚頭然也也取坐有

善大地慈陽普照起於然

失心須知應劫輪迴是周擬談

之一念塵世迷道此由道量

道なるなり。

元 　　むかひて愛語をきくは、おもてをよ

筆 　　ろこばしめ、こゝろをたのしくす。む

かはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂

に銘ず。知るべし、愛語は愛心よりお

こる、愛心は慈心を種子とせり。愛語

よく廻天のちからあることを學すべきなり、たゞ能を賞する

のみにあらず。
(正法眼藏)

正法眼藏
九十五卷
鎌倉時代中期
に成つた曹洞
宗の根本典籍

鴨長明

出家

歌人

元和歌所寄人

建保元年(一

八七三)歿

年六十三

日野

現京都市伏見

區日野

いはば旅人の

亦猶行人人之

造旅宿老蠶

之成獨繭矣

其住幾時乎

(池亭記)

二〇 日野の閑居

鴨 長 明

こゝに六そぢの露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の栖にならぶれば、また百分が一に及ばず。とかくいふ程に、齡は歳々にたかく、栖は折にせばし。その家の有様、世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めてつくらず。土居を組み、打覆を葺きて、つぎめ毎にかけがねをかけたなり。もし心になはぬ事あらば、易く外へ移さんがためなり。その改めつくる事、いくばくの煩ひがある。積むところ僅かに二輛。車の力をむくゆる外には、更に他の用

閑居

途いらす。

日野山

現日野に在る

眞言宗の名刹

法界寺の寺界

往生要集

六卷

往生極樂に關

する經倫の要

文を集めた書

源信僧都著

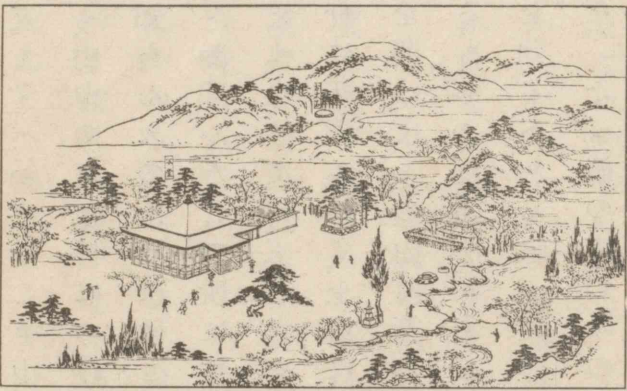
いま日野山の奥に跡を隠して後、東に三尺餘りの廂をさして、柴折りくぶるよすがとす。南に竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚をつくり、北に寄せて障子を隔てて阿彌陀の繪像を安置し、そばに普賢をかけ、前に法華經を置けり。東のきはに蕨のほどろを敷きて夜の床とす。西南に竹の釣棚を構へて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち和歌管絃往生要集ごときの抄物を入れたり。傍らに琴琵琶各一張をたつ。いはゆるをり琴つぎ琵琶これなり。假の庵のありやう、かくの如し。その處のさまをいはば、南に筧あり、岩をたてて水をためたり。林の木近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛跡をうづめり。谷しげけれど、西晴れたり。

跡の白波に云々
世の中を何に
たとへむ朝ぼ
らけ漕ぎ行く
船のあとの白
波 (拾遺集)
岡の屋
現京都府宇治
郡宇治村の内
満沙彌
沙彌滿譽
奈良朝初期の
歌人
桂の風云々
淨陽江頭夜送
客。楓葉荻花
秋瑟瑟。
(白樂天)
淨陽の江
現中華民國江
西省九江縣を
流れる揚子江
の一部
源都督
桂大納言源經
信
歌人 琵琶の
名手

觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くして西方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は蝸の聲、耳に満てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならぬ時は、自ら休み、自ら怠る。妨ぐる人もなく、又、恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守る。としもなくとも、境界なければ、何につけてか破らん。もし又跡の白波にこの身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、淨陽の江を思ひやりて、源都督の行ひをならふ。もし餘りの興

眞木の島
現京都府久世
郡横島村
山鳥の云々
山鳥のほろほ
ろとなく聲き
けば父かとぞ
思ふ母かとぞ
思ふ
(玉葉集)
峯のかせき云々
山ふかみなる
るかせきのけ
ぢかきに世に
遠ざかる程ぞ
知らるる
(西行)



石丈方と師薬の野日

あれば、しばし松の響に秋風樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれど、人の耳を悦ばしめんとにはあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。もし夜静かなれば、窓の月に故人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かとうたがひ、峯のかせきの近く馴れたるにつけても、世に

おそろしき山
山ふかみけぢ
かき鳥の音は
せて物おそろ
しきふくろふ
の聲 (西行)

遠ざかる程を知る。或は又埋み火をかき起して、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねば、梟の聲をあはれむにつけても、山中の氣色、折につけて盡くる事なし。況や、深く思ひ、深く知らん人のためには、これにしも限るべからず。

おほかたこの所に住み初めし時は、あからさまと思ひしかども、今すでに五とせを経たり。假の庵もや、古里となりて、軒に朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便りに都を聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして、その數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。

寄居蟲がは小さき貝を好む。これ身知れるによりてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち人を恐るゝが故なり。我またかくの如し。身を知り、世を知れば、願はず、わしらず、たゞ靜かなるを望とし、愁なきを樂しみとす。

すべて世の人の栖を作るならひ、必ずしも身のためにせず。或は妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のためにつくる。或は主君・師匠及び財寶・牛馬のためにさへこれをつくる。我今身のために結べり、人のためにつくりず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身の有様、ともなふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ廣くつくれりとも、誰を宿し、誰をか据ゑん。

それ、人の友とあるものは、富めるを尊み、懇なるを先とす。

必ずしも情あると素直なるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかじ。人の奴たる者は、賞罰の甚だしく、恩顧厚きを先とす。更にはぐくみあはれむと、安く靜かなるとをば願はず。たゞ我が身を奴婢とするにはしかず。いかゞ奴婢とするならば、もしなすべき事あれば、すなはち己が身をつかふ。たゆみならずしもあらねど、人をしたがへ人をかへりみるよりやすし。もしありくべき事あれば、自らあゆむ。苦しといへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。今一身をわかつて二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よく我が心に適へり。心身の苦を知れば、苦しむ時はやすめつ、まめなればつかふ。つかふとても、度々過ぐさず。ものうしとても心を動かすことなし。いかに況や、常にありき常に働くは、養生なる

べし。何ぞ徒らに休みをらん。人を悩ますはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひまた同じ、藤の衣、麻の衾、得るに隨ひて、はだへをかくし、野邊のをはぎ、峯の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。かて乏しければ、おろそかなる報をあまくす。すべてかやうの樂しみ、富める人に對していふにはあらず、たゞ我が身一つにとりて、昔と今となぞらふるばかりなり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、象馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望みなし。今さびしきすまひ、一間の庵自らこれを愛す。おのづから都に出でて身の乞食となれることを恥づといへども、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に

魚にあらざれば
子非魚、安
知魚之樂。
(莊子)

著することをあはれむ。もし人このいへることをうたがはば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水にあかず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林をねがふ、鳥にあらざればその心をしらず。閑居の氣味も亦おなじ。住まずして誰か悟らん。

一期の月影云々
ながむれば月
かたぶきぬあ
はれ我がこの
世の程もかば
かりぞかし
(後拾遺集)

抑、一期の月影かたぶきて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の關に向かはんとす。何のわざをかかこたんとする。佛のをしへ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に著するも、障りなるべし。いかゞ要なき樂しみをのべて、空しくあたら時をすぐさん。靜かなる曉、このことわりを思ひつゞけて、自ら心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はんとなり。然るを、

淨名居士
維摩經語
印度の居士
方丈の室に住
んだ
周梨槃特
釋迦の弟子中
の魯鈍者
十六羅漢の一

汝姿は聖人に似て、心は濁りにしめり。栖は即ち淨名居士の跡をけがせりといへども、保つところはわづかに周梨槃特が行にだに及ばず。もしこれ貧賤の報の自ら惱ますか、はた又、妄心の至りて狂はせるか。その時、心更に答ふることなし。たゞかたはらに舌根をやとひて、不請の阿彌陀佛、兩三遍申して止みぬ。

(方丈記)

方丈記
一卷
鎌倉時代初期
に成つた隨筆

吉田兼好

本姓卜部

出家

歌人

元左兵衛尉

正平五年(二

〇一〇)歿

年六十八

桃李云々

桃李不言春

幾暮、煙霞無

レ跡昔誰柄。

(和漢朗詠集)

京極殿

藤原道長の第

現京都市上京

區の内 御所

の東に在った

法成寺

京極殿附近に

在った天台宗

の寺

御堂殿

藤原道長建立

藤原道長

二 只今の一念

吉田兼好

あすか川の淵瀬常ならぬ世にしあれば時うつり事さりた
のしびかなしびゆきかひてはなやかなりしあたりも人すま
ぬ野らとなり變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいは
ねば誰と共に昔をかたらん。まして見ぬいにしへのやん
ことなかりけん跡のみぞいとばかなき。

京極殿法成寺など見るこそ志とまり事變じにけるさま
はあはれなれ。御堂殿の作りみがかせ給ひて庄園おほくよ
せられわが御族のみ御門の御うしろみ世のかために行末
までとおぼしおきし時いかならん世にもかばかりあせ果て
んとはおぼしてんや。大門金堂などちかくまでありしかど。

大
一
天
皇

正和

正和

花園天皇の御

代の年號(一

九七二—一九

七六)

無量壽院

法成寺の阿彌

陀堂

行成大納言

藤原行成

能書家

三蹟の一

萬壽四年(一

六八七)歿

年五十六

兼行

源兼行

能書家

正和の比南門は焼けぬ。金堂はその後たふれふしたるまゝ
にてとりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたと
でのこりたる。丈六の佛九體いとたふとくてならびおはし
ます。行成大納言の額兼行が書ける扉あざやかに見ゆるぞ
あはれなる。法華堂などもいまだ侍るゆり。これも又いつ
までがあらん。かばかりの名残だになき所々はおのづから
石ずゑばかりのこるもあれど、さだかに知れる人もなし。
さればよろづに見ざらん世までをおもひおきてんこそは
かなかるべけれ。

人間のいとなみあへるわざを見るに、春の日に雪佛を作り
て、そのために金銀珠玉のかざりをいとなみ、堂塔をたてんと

するに似たり。その構へをまちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚だおほし。

けふはその事をなさんと思へど、あらぬいそぎ先づ出て来てまぎれくらし、待つ人はさはりありた。たのめぬ人は來り、たのみたる方の事はたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、やすかるべき事はいとこゝろぐるし。日々に過ぎゆくさまかねて思ひつるに似ず。一年の事もかくのごとし、一生の間も又しかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかとおもふに、おのづからたがはぬ事もあればいよく物は定めがたし。不定と心得ぬるのみ、ま

ことにてたがはず。

蟻のごとくにあつまりて、東西に急ぎ、南北に走る。高きあり、卑しきあり。老いたるあり、若きあり。行く處あり、歸る家あり。夕にいねて朝に起く。いとなむ所何事ぞや。生をむさぼり、利をもとめてやむときなし。身をやしなひて何事をかまつ。期する所、たゞ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何の樂しみかあらん。まどへるものはこれをおそれず、名利におぼれて、先途のちかきことをかへりみねばなり。おろかなる人はまたこれを悲しぶ、常住ならんことを思ひて、變化の理をしらねばなり。

大事を思ひ立たん人は去りがたく心にかゝらん事のほいととげずして、さながら捨つべきなり。

「しばしこのことはてて」おなじくはかのこと沙汰しおきて

「しかく」のこと人の嘲やあらん、ゆくすゑ難なくしたゝめま

うけて「年來もあればこそあれ、そのこと待たん程あらじ、物さ

わがしからぬやうに」など思はんには、去らぬ事のみいと

かさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべか

らず。おほやう人を見るに、少し心ある際は、皆このあらまし

にてぞ一期はすぐぬる。

近き火などに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身をたすけん

とすれば、恥をもかへりみず、財をも捨ててのがれさるぞかし。

命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火のせむるよ
りも速に、のがれがたきものを、その時、老いたる親いときなき
子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

筆をとればもの書かれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。

杯をとれば酒を思ひ、賽をとれば攤うたんことを思ふ。心は

必ず事に觸れて來る。かりにも不善の戯れをなすべからず。

あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見

ゆ。卒爾にして多年の非をあらたむることもあり。かりに

今この文をひろげざらましかば、この事をしらんや。是、則ち

觸るゝ所の益なり。

心更におこらずとも、佛前にありて、數珠をとり、經をとらば、

忘るうちにも善業おのづから修せられ散亂の心ながらも繩ツルの床ツクリに坐せば覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず外相ソトノカタもしそむかざれば内證ウチノシかならず熟す。しひて不信といふべからずあふぎてこれを尊むべし。

ある人弓射ることをならふにもろ矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく、初心の人二つの矢をもつことなかれ。後の矢をたのみてはじめの矢に等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へといふ。わづかに二つの矢師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、萬事にわたるべし。

申
矢
もう矢

道、
学ばぬの何道

道を學する人、夕には朝あらんことをおもひ、朝には夕あらんことを思ひて、重ねて懇に修せんことを期す。況や、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あるを知らんや。なんぞ只今の一念において、たゞちにすることのはなはだ難き。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにしておこたる人のためにいはば、一錢かろしといへども、これをかさぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期、忽ちにいたる。されば道人は、とほく日月を惜しむべからず、只今の一念むなしく過ぐる事を惜しむべし。

徒然草
二卷
吉野朝時代に
成った隨筆

二一 只今の一念

只今の一念

(徒然草)

三 隅田川

人物

シテ

梅若丸の母(狂女)

ワキ

隅田川渡し守

ワキヅレ

旅人(都の者)

子方

梅若丸の幽霊

處

隅田川

時

三月十五日

ワキ 「これは武藏國隅田川の渡し守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又この在所に、さる子細候ひて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人数を集め候。そ

の由皆々心得候へ。

ワキヅレ 「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。

「かやうに候者は都の者にて候。われ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて只今罷り下り候。

「雲霞あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こゝぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く著きにけり、渡りに早く著きにけり。

「急ぎ候程に、これははや隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出て候。急ぎ乗らばやと存じ候。

「いかに船頭殿、舟に乗らうずるにて候。

ワキ 「なか／＼の事、急いで召され候へ。まづ／＼御出で候

あとのけしからず物騒に候は、何事にて候ぞ。
ワキヅレ 「さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなく面白
う狂ひ候を見候よ。

ワキ 「さやうに候はば、暫く舟を留
めてかの物狂を待たうずるにて
候。まづ此方へ渡り候へ。」

シテ 「げにや人の親の心は闇にあ
らねども、子をおもふ道に迷ふと
は、今こそ思ひ白雪の道行き人に
言傳てて、行方を何と尋ぬらん。」



は心の親の人やにげ

「聞くや如何に、上の空なる風だにも、

人の親の云々
人の親の心は
闇にあらねど
も子を思ふ道
に迷ひぬるか
な (後撰集)
白雪の云々
春くれば雁歸
るなり白雪の
道ゆきぶりに
ことやつてま
し (古今集)
聞くや如何に
聞くやいかに
上の空なる風
だにも松に音
する習ありと
は (新古今集)

地 へ松に音する習あり。

シテ へ眞葛が原の露の世に、

地 へ身を恨みてや、明け暮れん。

シテ へこれは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外
に獨り子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東
の程遠き、東とかやに下りぬと聞くより心亂れつゝ、そなた
とばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。

地 へ千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを。

へもとよりも契假りなる一つ世の、契假りなる一つ世の、そ
のうちをだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の
別れこれなれや。尋ぬる心の果やらん、武藏國と下總の中
にある隅田川にも著きにけり、隅田川にも著きにけり。

北白河
現京都市左京
區北白河
逢坂の關
現大津市南方
の逢坂山に在
つた關所
千里を云々
親千里行不
忘子。
(白樂天)
四鳥の別れ云々
桓山之鳥生
四子焉。羽翼
既成、將分
于四海。其母
悲鳴而送之。
(孔子家語)

日も暮れぬ云々
渡守「はや舟
に乘れ日も暮
れぬ」といふ
に乗りて渡ら
むとするに
(伊勢物語)

シテ 「なう舟人、われをも舟に乘せて賜はり候へ。
ワキ 「おことはいづくよりいづ方へ下る人ぞ。
シテ 「これは都より人を尋ねて東へ下る者にて候。
ワキ 「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂
はずはこの舟には乗せまじいぞとよ。
シテ 「うたてやな、隅田川の渡し守ならば、日も暮れぬ、舟に乗
れとこそ承るべきに、さはなくて、かたの如くも都の者を、
舟に乗るなと承るは、隅田川の渡し守とも覚えぬ事をな宣
ひそよ。
ワキ 「げに、都の人とて、名にし負ひたるやさしさよ。
シテ 「なう、その言葉はこなたも耳にとまるものを。かの業

平もこの渡りにて、名にし負はば、いざ言問はん都鳥、わが
思ふ人はありやなしやと。

「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ
鳥なり。あれをば何とか申し候ぞ。

ワキ 「あれこそ沖の鷗候よ。
シテ 「よし、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、などこの隅田

川にて白き鳥をば都鳥とは答へ給はぬ。
ワキ 「げに、誤り申したり。名所には住めども心なくて、

都鳥とは答へ申さで、

シテ 「沖の鷗と夕波の、

ワキ 「昔にかへる業平も、

シテ 「ありやなしやと言問ひぬ。

昔にかへる云々
いとどしく過
ぎにし方の戀
ひしきにうら
やましくもか
へる波かな
(伊勢物語)

舟競ふ云々
舟ぎほふ堀江
の川のみなぎ
はに來居つづ
鳴くは都鳥か
も (萬葉集)
堀江の川
難波堀江
現大阪市内を
流れる天満川
に當るといふ

地へわれも亦いざ言問はん都鳥いざ言問はん都鳥わが思ひ
子は東路にありやなしやと問へどもく答へぬはうたて
都鳥鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟競ふ堀江の川の水
際に來居つゝ鳴くは都鳥それは難波江これは又隅田川の
東まで思へば限りなく遠くも來ぬるものかな。さりとは
渡し守舟こぞりて狭くとも乗せさせ給へ渡し守さりと
ては乗せてたび給へ。

ワキ 「かゝるやさしき狂女こそ候はね急いで舟に乗候へ。
この渡りは大事の渡りにて候。かまひて靜かに召され候

へ。
「最前の人舟に召され候へ。」

ワキヅレ 「なうあの向かひの柳の下に人の多く集りて候は
何事にて候ぞ。

ワキ 「さん候あれは大念佛にて候。それにつき哀れなる物
語の候。この舟の向かひへ著き候はん程に語つて聞かせ
申し候べし。

「さても去年三月十五日。やしかも今日の事にて候。人
商人の都より年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひ取つ
て奥へ下り候が、この幼き者未だ習はぬ旅の疲にや、以ての
外に違例し、今は一足も引かれずとて、この川岸にひれふし
候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばその
まゝ路次に捨て置き、商人は奥へ下つて候。さる間この邊
の人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、様

奥
現奥羽地方の
汎稱

様に痛はりて候へども、前世ぜんぜの事にもや候ひけん、たんだ
 弱りに弱り、既に末期と見えし時、
 おことかたはいづく如何なる人ぞと、
 父の名字をも國をも尋ねて候へ
 ば、われは都北白河に吉田の何某
 と申しし人の只ひとり子にて候
 が、父には後れ、母ばかりに添ひ奉
 り候ひしを、人商人にかどはされ
 て、かやうになり行き候。眞は都
 の人の足手影までもなつかしう
 候へば、この道のほとりにつきこめて、しるしに柳を植ゑて
 給はれと、おとなしやかに念佛四五遍唱へ、終に事終つて候。



日五十月三年去もてさ

なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば、船中にも少々
 都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひ
 て御弔ひ候へ。や、よしなき長物語に舟が著いて候。とう
 とう御あがり候へ。
 ワキヅレ 「いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁な
 がら念佛を申さうずるにて候。
 ワキ 「いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ、急いで
 あがり候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し
 候よ。急いで舟よりあがり候へ。
 シテ 「なう舟人、今の物語はいつの事ぞ。
 ワキ 「去年三月しかも今日の事にて候。

シテ 「さてその稚兒の年は。

ワキ 「十二歳。

シテ 「主の名は。

ワキ 「梅若丸。

シテ 「父の名字は。

ワキ 「吉田の何某。

シテ 「さてその後は親とても尋ねず、

ワキ 「親類とても尋ね來ず、

シテ 「まして母とても尋ねぬよなう。

ワキ 「いや思ひもよらぬ事。

シテ 「なう、親類とても親とても尋ねぬこそは理なれ。その

幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にてはさむらへとよ。な

う、これは夢かや、あら、あさましや候。

ワキ 「言語道斷。今まではよその事とこそ存じて候へ。さ

てはおことの子にて候ひけるぞや。あら、痛はしや候。よ

しよし、御歎き候ひても歸らぬ事、かの人の墓所を見せ申し

候べし。此方へ渡り候へ。

ワキ 「これこそ亡き人の舊跡にて候。よくよく御弔ひ候へ。

シテ 「今までは、さりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下

りしに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見る事よ。

さて無慙や死の縁とて、生所を去つて東のはての、道の邊

の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそある

らめや。

道の邊の土云々
古墓何代人。
不知姓與名。
化作路傍土。
年々春草生。
(白樂天)

地へさりとは、人々、この土を返して今一度、この世の姿を母

に見せさせ給へや。

へ残りても、かひあるべきは空しく
て、かひあるべきは空しくて、あるは
かひなきは、き木の、見えつ隠れつ
面影の、定めなき世の習、人間憂の花
盛り、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月
の影、不定の雲覆へり。げに目の前
の憂き世かな、げに目の前の憂き世
かな。



この土を返して今一度

ワキ 「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申

は、き木の云々
その原や伏屋
におふる帯木
のありとはみ
えてあはぬ君
かな
(新古今集)

し候ひて、後世を御弔ひ候へ。へ既に月出で川風も、はや更
け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らしす、
むれば、

シテ へ母は餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯ひれふ
して泣きゐたり。

ワキ 「うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はん
をこそ亡者も喜び給ふべけれど、へ鉦鼓を母に參らすれば、
シテ へわが子の爲と聞けばげに、この身も梟鐘を取りあげて、
ワキ へ歎を止め、聲澄むや、

シテ へ月の夜念佛もろともに、

ワキ へ心は西へと一すぢに、

ワシテ へ南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛、

シテ 南無阿彌陀佛。

地 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

シテ 隅田河原の波風も、聲立て添へ

て、

地 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無

阿彌陀佛。

シテ 名にし負はば都鳥も音を添へ

て、

子方 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南

無阿彌陀佛。



あはれわが子か

シテ 「なう、只今の念佛の聲は、正しくわが子の聲にて候。この塚の内にてありげに候よ。

ワキ 「われらもさやうに聞いて候。所詮此方の念佛をばと

どめ候べし、母御一人御申し候へ。

シテ 今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛、

子方 南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、

地 聲の内より幻に見えければ、

シテ あれはわが子か、

子方 母にてましますかと、

地 互に手に手を取り交せば、又消え／＼となり行けば、いよ

いよ思はます鏡、面影も幻も見えつ隠れつする程に、東雲の

空もほの／＼と明け行けば、跡絶えて、わが子と見えしは塚

の上の草茫々として、唯しるしばかりの浅茅が原となるこ

そ哀れなりけれ、なるこそ哀れなりけれ。

(寶生流正本)

今一聲こそ云々
ゆきやらで山
路くらしつ時
鳥いま一聲の
聞かまほしき
に (拾遺集)

野上豊一郎

英文學者

能樂研究者

九州帝國大學

講師

大分縣の人

明治十六年生

敵の持士
野上豊一郎
を本論として
論じて
敵の又持
九十九は
ある。

二三 能面の表情

野上豊一郎

演戲に際して、人間の顔面筋がどれだけ複雑に感情の徴候を細別して表現し得るかを考へてみるに、最も多く舞臺上の経験を積んだ役者であつても、彼等自らの意志の力で顔面に表し得る感情の種類は極めて狭く限られたもので、多くの場合、彼等は感情を表現しないで、その表現を摸倣してゐるに過ぎない。たとひ、その顔面によつて感情を表現し得る役者であつても、必要に應じて、任意にその顔を赤くし、又は青くして見せることは不可能である。

その上、不便なことには、人間は誰しもその顔面をば只一つしか持ち合はせてゐない。丁度聲樂家がいつも一つきりの聲でうたはねばならぬ如く、役者は持つて生まれた一つきりの顔面でどんな性格をも演出しなければならぬ困難に暴されてゐるのである。

この困難から役者を救ひ出したものは假面である。假面の發明と共に、今まで演出上の障碍となつてゐた性年齢種属等の差別が取除かれ、男が女になり、青年が老人になり、人間が超自然物になることが容易となつた。同時に、またそれに依つて扮装の時間が節約されるやうにもなつた。つい十分前まで艶麗な白拍子として舞つてゐた役者は、何等の困難なしに、唯その假面と装束とを取替へることに依つて、精悍な武將の幽靈として出現することが出来るであらうし、また、鐘の中に飛びこんだ美しい少女は、その鐘の引き上げられる時には、

すでに角の生えた、唇の裂けた、悽愴な悪鬼と化してゐることが出来るであらう。



さうして、何よりも能面の名譽であることは、その一枚の板に彫られた表情の均勢が、人間の肉の顔の如何なる調和を以てしても企て及ばない程の高貴さを保持してゐることである。このことを如

羽衣
能樂の代表的
な曲の一
増の面
能の女面の一
種

實に實感するためには、能面が全然能役者から奪はれた場合を假定してみるとよい。例へば、羽衣の天人の端麗な増の面の代りに、或役者の脂ぎつた角張つた顔に白粉を塗り、厚ぼつたい唇に紅をさし、悪賢い眼球を微動させながら、いや疑は人

市村
歌舞伎の名家
盛綱の芝居
「近江源氏先陣館」の第八段
尾上
中村
共に歌舞伎の名家
觀世
能樂の名家

間に在りなどと謠つてゐる姿を想像してみたならば、誰が能の興へる簡淨清楚な趣の百分の一をも期待し得ようか。のみならず、肉の顔面は屢、私たちの想像が舞臺上の性格の内面に穿入しようとするのを妨げることがある。顔面を單純化し、淨化し、様式化した假面は、或意味に於ては、最も完全な顔面である。之に對して、肉の顔面は、それがいかに美しく出來た顔面であつても、決して完全な顔面であるとは云へない。市村某の演じる盛綱の芝居を見ることは、要するに市村某の藝術的個性に興味を持つことであつて、それはまた彼が尾上某、中村某と如何に違つた技術を示すかの興味である。随つて、彼の扮する盛綱は、如何なる瞬間にも市村某の顔面である。然るに能に於ては、たとひその假面の下は觀世某の顔であつ

實生
能樂の名家

ても、實生某の顔であつても、一度それを懸ければ、同時に其處には想像して貰ひたい種類のものが容易に想像される。さうして肉の顔面を通して絶えず聯想されがちなその人の實生活上の事件などは、比較的安全に遮蔽されて、藝術的幻影の築き上げられることが容易且敏速である。これは、個性よりも類型に依つて、寫實よりも様式化に依つて、それ自らの世界を造り出さうとする能に於ては、最も適當な表現の具を見出したものと謂ふべきである。

若し、能面の缺點として挙げ得べきものを求めるとすれば、その目が動かなかつたり、脣が動かなかつたりすることであらう。併し、この缺點と思はれるものは、能面に於ては十分に償はれるやうに工夫されてある。先づ脣について見ると、女

くもらす
てらす
共に能樂の術
語

面などでは、それをはつきりと開いた場合と、全く閉ぢた場合と、その二つの場合を豫想してその中間を取り、程よき半開の形に彫られてある。その半開は閉ぢてないことを意味する程度のものであるから、假面の傾斜の角度に依つて、固く結ばれた脣とも見え、また別の傾斜に於ては、晴れやかに開かれた脣とも受取られる。能面は普通に幾らか俯向け氣味に懸けられるきまりであるが、必要に應じてはくもらして、即ちそれを一層俯向けて、憂愁の陰影を多くしたり、また反對に仰向けにてらして、朗かな光を與へたりする。脣はそれに應じて開閉されるが如き印象を與へ、面のくもらされた時には閉ざれてらされた時には綻びて微笑を湛へるが如く見える。この効果を最もよく助けるものは、左右の口角に近く口輪匝筋の

笑筋と接してゐるあたりに、微妙な刳貫が作られて、其處になごやかな微笑が無盡藏に蓄積されてあるかと思はれるやうな用意の施されてあることである。何故にこの用意は微笑の爲のみに行はれて、反對の表情に對しては無視されてあるかといふと、能面は本來悲劇的情調の上に作られたものであるから、普通の状態に於ては、幾分の憂鬱を帯びてゐる。それ故に、若しそれに變化を與へるとすれば、それは如何にすれば晴れやかな快活な表現に變へ得べきかの工夫を加へることに限られるわけである。

次に目については、之は唇よりも重要な役目を持つてゐるだけに、この木製の心の窓を如何にして生かさうかといふことに關して、创作者のなみ／＼ならぬ苦心の迹が窺はれる。

見開く場合と細目にする場合とに對しては、唇の開閉と同じやうに、面のてらし方、くもらし方に依つて容易にそれが行はれる。肉眼に於て、目を伏目にする場合には、上眼瞼舉筋が重く垂れて、眼球をその中に隠すのであるが、役者が假面をくもらすことは、それと同じ効果を生じるのである。反對に面をてらすと、眼輪匝筋の全部が明るい平坦な平面を作り、同時に眼瞼溝も眼瞼頬溝も皺眉筋も消えて了ふので、憂鬱の表情は一つも見られなくなる。併し、何よりの困難は、假面に於ては、目にとつて一番大切な眼球の動かないことである。之に對しては、能面作者は、動かない眼球を白い結膜の上に全部浮き出させることの不利を慮つて、眼球の上端と下端とを用心深く眼瞼の中に隠し、結膜は僅かに眼球の周圍のみを白く残

して、他は内眦の側も外眦の側も思ひきり黒く染め、斜り抜かれた眼球と結膜の白い部分との對照を際立たないやうにし、更に稱讚に値することには、斜り抜かれた二つの眼球に、正面から見ると、平行する視線を投げるやうな位置を保たせてある。であるから、役者が舞臺上で或一點を凝視する必要を感じた場合には、面を強くその方向へ振向け、一方の眼球を以て直視すれば、他の眼球からの視線は都合よくその對象物の上に於て交錯するが如き印象を與へ得るのである。併し能に於ては、斯くの如き凝視を必要とする場合はそれほど多くなく、舞つてゐる間の大部分は、寧ろ艷麗高貴な顔かんばせを保つてゐることの方が肝要である。

一體假面は、その本來からして、刹那的には如何なる強烈な

感情をも表し得なければならぬが、常態としては無表情に近い表情に安定してゐて貫ひたいのである。内に十分な能力を蓄積してゐて、常はその蓄積の量を豫想させないやうにあつて貫ひたいのである。この要求に對する考慮の結果が、上に述べた如き、目脣、その他の無表情的表情となつたのである。随つてそれは、喜悅の表情にも、悲哀の表情にも、快活の表情にも、憂鬱の表情にも、いづれにも變り得る表情であることはいふまでもない。

(能—研究と發見—)

志
三三三

國語
卷九
終

國語
卷九

